

東海地区

大学図書館協議会誌



64

2019

東海地区大学図書館協議会

目 次

巻 頭 言	大学図書館の魅力について 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター長	的場ひろし	1
講 演 要 旨	利用者と図書館をつなぐ空間づくり 空間演出コンサルタント	尼川 ゆら	3
講 演 要 旨	大学における学修支援と図書館の役割 青山学院大学教授・図書館長・アカデミックライティングセンター長	野末俊比古	8
報 告 要 旨	青山学院大学アカデミックライティングセンターの活動について 青山学院大学教授・図書館長・アカデミックライティングセンター長	野末俊比古	16
報 告 要 旨	学生協働による学修支援活動 — 静岡理工科大学附属図書館の取り組み — 静岡理工科大学附属図書館 課長	岡部 恵理	18
報 告 要 旨	科学に関する展示の試み 静岡文化芸術大学図書館・情報センター長	的場ひろし	21
討 論 要 旨	パネルディスカッション — 大学図書館の学修支援 — パネリスト 野末俊比古 (青山学院大学) 岡部 恵理 (静岡理工科大学) 的場ひろし (静岡文化芸術大学) モデレーター 林 左和子 (静岡文化芸術大学)		23
行 事	第73回(2019年度)東海地区大学図書館協議会 総会・研究集会		27
会 則 等			35
総会当番館一覧			40
加盟館一覧			41
役員館一覧			45
研修会一覧			47
広告主一覧			

大学図書館の魅力について

静岡文化芸術大学 図書館・情報センター長

的 場 ひろし

8月20日に、第73回東海地区大学図書館協議会総会および研究集会在、静岡文化芸術大学にて開催されました。だいたい80年の周期で担当館が回ってくるそうですが、私がセンター長の職にある間に当館が開催館となり、協議会の皆様と関わりが持てたことは、大変なめぐり合わせであり、幸運であったと思います。総会での司会進行の他に、研究集会では事例報告等をさせていただきました。

総会と研究集会に参加し、まず感じたことは、東海地区の大学図書館関係者間の連帯感です。出席された教職員の方々が様々な機会交流されてきたことが窺えました。これは大学の他の事務部門にはなかなか見られないことです。勤続20年の職員の方を表彰する制度もまた、この協議会の良い特徴の一つだと思います。

数十年前の記憶を思い起こせば、高校時代の図書委員会にも、他の委員会とは異なる独特の雰囲気がありました。図書館の中になぜか居心地のよい場所があって、担当の教諭、学校司書、委員の生徒たちが自然に交流する土壌がありました。特に用事もないのに、よく図書館に行って話をしていたことを思い出します。大学図書館同士の交流とはまた違う話ではありますが、図書館という場の特殊性が、そこに関わる人に及ぼす影響が少なからずあるように思います。

幸い、本学の学生にも図書館好きが多いようで、年間の貸し出し冊数は、全国の大学平均の二倍ほどになるそうです。しかし直接学生と話していると、ほとんど図書館を使わないという学生が結構いることに気付きます。さらには、そもそも本を読まないという学生も案外多いのです。現代は、「本」以外に様々な形で情報が摂取できる環境がありますが、人類の叡智の多くの部分は、まだ本の中にしか存在していないと私は考えています。図書館を積極的に使う学生に向けて、蔵書を充実させ、各種サービスを整備することは重要なことですが、一方で、図書館に足を向けようとしない学生に対して図書館に来なくなるような工夫を行い、日頃本を読まない学生に本に触れる機会を与えることも、同じように重要なことだと思います。

授業と連携した学習支援を積極的に行うことに加えて、図書館内で展示やイベントを行い、それらと図書館の蔵書を有機的に結びつけて提示することも有効と考え、本学での最初の試みとなる「科学に関する展示」を今年3月から行いました。この件については本号に事例報告として掲載されています。科学に関する展示では、デザイン研究科の大学院生が中心になり横長の大きな図表を制作しましたが、今後は図表だけでなく、実際に手に取って体験できるようなタイプの展示物も扱っていきたいと考えています。当館の展示スペースは幅7m程度で、あまり広いとは言えませんが、カウンターの近くで職員が目が届きやすい場所にあるため、本学教員が保有する様々な研究資料や教材、例えば珍しい楽器や珍しいゲーム等も展示しやすい面があります。そして、図書館の蔵書から関係する本を選び陳列することによって、「まず展示物に接して興味を感じ、さらに本からより深い知識を得る」という有機的な学びが可能になります。

また5月には、前述の科学の展示の一環として、高校生と大学生を対象としたワークショップを、展示の前に椅子を並べる形で実施しました。また、私のセンター長着任以前のことになりますが、過去に

は二十五絃箏という特殊な箏のコンサートを図書館の開館中に行ったこともあります。もちろん、図書館の中で実施するイベントである以上、これらの運用についてはいろいろ検討すべき点がありますが、図書館という場所の特殊性を活かした、通常とは異なる形式のワークショップ、コンサート、対談等、様々なイベントを考えることができますと思います。

このような施策によって、図書館に新しい魅力を感じ、またあそこに行ってみようと思う学生を増やすことができるのではないかと考えています。本学は、美術館、科学館、楽器博物館等に近い恵まれた立地にありますが、こうした文化施設とも連携しながら、大学図書館の魅力を向上させる試みを続けていきたいと考えています。

利用者と図書館をつなぐ空間づくり

空間演出コンサルタント

尼川 ゆ ら

■はじめに

私は大学で舞台美術を学び、その後も舞台に関わる仕事に携わってきました。舞台空間を作る仕事で培った空間作りの方法を図書館空間にも活かそうと、各地の大学図書館・公共図書館・専門図書館でレクチャーを行っております。2010年には『図書館を演出する—今、求められるアイデアと実践—』（丸本郁子監修 尼川ゆら・多賀谷津也子・尼川洋子著：人と情報を結ぶWEプロデュース）を出版しました。

今回の研修会では、図書館空間の演出をテーマに講演と2種類のワークショップを行いました。

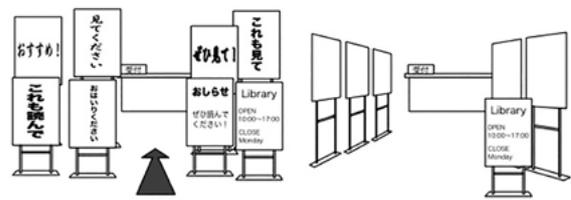
〈前半：講演〉

■利用者と図書館をつなぐ空間づくり

- ◎ 目的を知る
- ◎ 相手を知る
- ◎ 自分を知る

上記の3つは、何か行動を起こす前にまず考えるべき事柄です。これらは行動の芯になるもの、理念を形成するものです。この部分を曖昧にしたままプロジェクトを進めると、進むべき道を見失いかねません。何を目的とし、どのような相手に対して行うことなのか、自分自身の感覚、許容量、思いは？そして、そもそも図書館の目的とは何か、それらを確認してしっかりとしたコンセプトを持つことで、進むべき方向を知る基準とします。

○空間を知る



出所：『図書館を演出する—今、求められるアイデアと実践—』（人と情報を結ぶWEプロデュース）

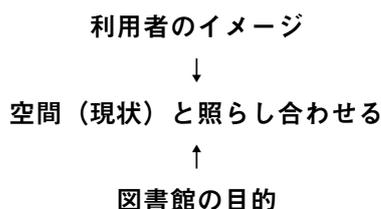
もし、空間の見直しを始めるなら、行動に移る前にまず現状を知る必要があります。空間にはその場所ごとに目的があります。例えば、入口空間は入ることが目的の空間です。利用者と図書館をつなぐならば、まずは入口という境界線を超えて図書館空間へと入ってもらわなければなりません。そのために優先されることは、“入りやすいこと”です。何があれば、あるいは、何がなければ入りやすいのか、それを考えて入り口の空間作りを始めなければなりません。

1つ1つ場所ごとの目的は何かを考えると、何が必要で、何が不要でないかを見極めることができます。利用者は利用者の目的に合わせて行動します。その場所の目的と利用者の目的を照らし合わせたならば、人の動き（流れ）が見えてきます。

○利用者をイメージする

利用者と言っても、利用者全員が同じ目的を持ち、同じ行動をするわけではありません。図書館の訪れた人にしても、情報を探す目的ではなく、例えば単に暇つぶしや待ち合わせが目的の人もあります。このように目的が違えば行動も変わり、視点も変わります。来館者が全て利用者かと

例えば、そうとは限りません。図書館に来た人の状況を具体的にイメージすることで、人々が空間の中で何を見て、何を見ていないかが浮かび上がってきます。来館者とそれぞれの場所の目的が合っているかを確認し、来館者が利用者になるためのポイントを見つけて改善することが、まずは利用者と図書館をつなぐ演出になります。



利用者と空間の様子が掴めたなら、より空間を巡って情報と出会ってもらうために、利用者を誘導する仕掛けが必要です。

- ・一目でわかる案内サインや見出し
- ・館内を把握できるマップ
- ・興味を引く展示 等

空間の中で、自分の進むルートや全体を簡単に把握することができると、行動の見通しが立てやすくなります。気になるものがあれば、利用者は自らそこまで進んでいきます。利用者の動きに合わせて視点も変化していき、目に触れるものが増えていきます。そうすれば、何かを伝えられる場所、情報と出会うチャンスも広がっていきます。

ただ、せっかくの案内サインも利用者の目に止まらなければ、効果を発揮しません。相手に伝えるためにも以下のポイントに注意する必要があります。

案内サインのポイント

- ・一目でわかる＝パッと見てわかること
- ・情報に順序をつけて伝える
- ・人の視線を考える
- ・情報と飾りを区別する
- ・誰にでもわかるようにする

(国籍、年齢、色の見えや感じ方の違いに関わらずわかること)

○空間を演出する

空間全体を整え、魅力的にするには、その空間のイメージをつくる必要があります。

イメージをつくるとは、コンセプトを目に見える形にすることでもあります。現在の空間の印象、利用者の印象を知り、目的や利用者に向合うイメージを抽出し、空間全体のイメージを決めます。目指すイメージが決まると、それに相応しい色や形、素材などが具体的に決まっていきます。例えば、集中して学ぶための空間に遊園地の色彩は合わないといった具合です。空間で使用する備品や飾り他、何かを空間に取り入れるときに決めたイメージと照らし合わせることで、相応しいものを選ぶ基準ができます。空間全体を整え、利用者に伝えたい・感じてほしい空間を作り、それを維持するためにも、コンセプトイメージを明確にすることは大切な作業です。

〈後半：ワークショップ〉

■ ワークショップ (1)

○利用者の動きを考える

フロアマップを使って、利用者の動きを検証する。

◎内容

- 1、参加者が各自勤務図書館のフロアマップを用意する。
- 2、筆記用具を用意し、講師が提示する利用者像に合わせて、マップ上の入り口の位置から 利用者になったつもりで歩くルートを一筆書きで書き込む。
- 3、講師が提示する複数のタイプの利用者（5人程度）がそれぞれどのような動きをしたか、またそこからどのような発見があるかを確認し、その後他の参加者のフロアマップと見比べながら意見を交換する
- 4、講師から提示した利用者像についての解説と出題意図の説明を行う。

このワークショップは、

- ・利用者を具体的にイメージすること
- ・空間の中での人の流れを把握すること

- ・人の流れができにくい（活用されにくい）場所を知ること
 - ・利用者がより情報とつながり、今後も図書館の利用者になるための仕掛けを考えること
- 以上を目標としています。結果を周りの参加者と分かち合うことで、互いが勤める図書館の特徴や工夫の紹介、あるいは悩みについてなどの意見交換ができることもこのワークの成果となります。

■ ワークショップ(2)

○空間のイメージをつかむ

図書館や利用者のイメージ、理想の図書館空間のイメージを探る。

(グループワーク)

◎内容

1、イメージワードの抽出

現在の図書館、利用者の印象、そして理想の図書館像を言葉にして書き出す。講師の用意した形容詞（可愛い・楽しい・華やか・シャープなど100語程度）から合うものや自由に思いついた言葉を大きな紙に書き出していく。

2、イメージ画像の抽出

講師が用意した写真の中から、現在の図書館と利用者の印象に合うものを選び出す。

用意した写真は、図書館には直接関係しないが、誰もが使う身近なものとして、腕時計・鞆・カップの3つのアイテムを使用。それぞれが数十種類ある中から、各アイテムを3枚ずつ、合計9枚を選ぶ作業をする。



3、イメージの分析・検証

(2)で選んだ写真を並べ、受ける印象を確認・分析する。

(例)

- ・カジュアルなアイテムが多い
- ・可愛いもの又は子供っぽいものが多い
- ・色味が多い／少ない
- ・地味／派手
- ・すべてが似た雰囲気／バラバラな印象

等

はじめに選び出したイメージワードとも照らし合わせながら、利用者も含めた現在の図書館のイメージ分析を進める。

4、理想のイメージを作る

(3)を参考に、理想の図書館のイメージに合う写真を選び直し、(3)のイメージの横に並べる。

5、イメージの分析・検証

(4)のイメージの確認・分析を行う。

6、理想の空間イメージを探る

(4)で選んだイメージと9つのカテゴリーに分かれたインテリアの写真資料とを照らし合わせ、理想の空間イメージを探る。(ナチュラル系、都会的、シック等)



以上の作業をグループごとに相談しながら進めていただきました。今回の参加者は、それぞれ違う大学図書館に勤務されているため、グループ分けは、総合大学・女子大学・医学系など比較的条件の近い大学図書館の参加者ごとに集まいただきました。ただ、中にはそれぞれ違うタイプの大学からの参加者が集まるグループもあり、イメージをまとめづらい様子もありましたが、そのグループは多種多様な学部のある大学の図書館という設定にして、どのグループも参加者自身の勤務図書館を参考にした、架空の大学図書館という想定で作業を進めていただきました。

このワークショップは、空間や人、理想などの曖昧ではっきりとは掴みにくいイメージを目に見える形に変換するための作業です。直接、図書館空間のインテリアコーディネートを考えたり、利用者の人物像を考えたりするのではなく、いつもと違う視点から物事を捉えることを一つの目的としています。アイテムを選ぶ段階では、コーディネートを気にする必要はありません。そのため、それほどストレスを感じることなく、楽しみながら選ぶことができます。ですが、選んだアイテムからは、利用者が好むイメージ（可愛いアイテムが多い、カジュアルなイメージ、等）や空間に抱くイメージ（モノトーンが多くやや寂しい印象、自然な茶色が多く穏やかな印象、等）が感じられます。選ばれたアイテムから、色味や形、素材の他、様々な特徴も具体的に確認できます。

今回は大学図書館ということで、主な利用者が大学生なので、現在の利用者のイメージに合わせて選ばれた写真ではどのグループにも同じアイテ

ムが選ばれるなど、似た印象になるグループが多かったように思います。それは男子学生・女子学生共にカジュアルなアイテムを身につけていることが多く、カジュアルなアイテムについてはあまり男女差がなく、どちらにもよく使われているためと考えられます。理系文系などの違いは、多少選ばれたものの色味に反映されていました。

現在のイメージに対し、理想のイメージは掴みづらいので、参加者には「利用者である学生が、この大学で学び、この図書館で学んだ後、どのような社会人になってほしいか」というテーマのもとにアイテムを選んでいただきました。

こちらは現在のイメージと違い、各グループそれぞれに個性が現れました。現在のイメージの中にあつたカジュアルなもの、あるいはやや子供っぽいイメージのアイテムが、それぞれエレガントであったり、理性的であったり、長く使えそうな大人のアイテムにそれぞれ変わるグループが多い中で、子供に関わる学部がある大学図書館のグループでは、「子供の心を忘れないでほしい」という願いを込めて、あえて子供っぽいアイテムが選ばれたり、参加者の利用者に対する思いが込められた結果となりました。

選ばれたアイテムには、先に選んだものより、統一された色味・形・素材の情報があり、それは空間のイメージカラーの参考や、何か備品を選ぶ際の基準にもなります。そのイメージをもっと具体的なインテリアイメージとつなげていけば、大きなリニューアルや新しく図書館をつくる際のデザイン参考イメージとしても使うことができます。

ただ、今回は架空の大学図書館と設定しているため、結果がそのままそれぞれの職場に当てはまるわけではありません。今回は、現状と利用者について視点を変えて、具体的に、且つ客観的に捉えることを目的とし、また、理想やコンセプトなどの目に見えない目標を、目に見える形にする一つの方法の参考として、ワークショップに取り入れました。

イメージをつくる＝コンセプトの可視化

■ 終わりに

レクチャーとワークショップを通じて、様々な方法を提案しましたが、もし、空間の見直しを考えているならば、まずは日常業務の傍らにできるような小さいことから始めてみることを提案します。

たとえ小さな変化でも、それは「より良くしたい！」という誰かの思いから生まれています。その思いが伝わり、空間の空気を、その場所の居心地の良さを生みます。

また、普段から感じている、なんとなく良い・なんとなく居心地が悪い、あるいは足が向きやすい、向きにくいなどの曖昧な感覚にも、改善のヒントが隠されています。無意識に感じている小さな事柄に改めて意識を向けることで、なかなか気づくことのできない小さなプラス要素、あるいはマイナス要素に気づくことができます。小さい事柄だからといって、影響も小さいとは限りません。ほんの些細な不具合が、空間の雰囲気や人の流れをマイナスな方向へと変えてしまっている場合もあります。魅力もまた、なんでもないところに転がっていたりします。

まずは無理のない小さなことから始めてみて、その変化を体感することをお勧めします。

※ 2019年2月14日に行った研修内容と資料をもとに加筆修正を行いました。

大学における学修支援と図書館の役割

青山学院大学教授・図書館長・アカデミックライティングセンター長

野末 俊比古

1. はじめに

ご紹介いただいたとおり、私の出身は浜松市(旧引佐町)です。地元ということで、気合いを入れつつ、リラックスして進めてまいります。

今日は、大学における学修支援と大学図書館の役割がテーマです。私は、勤務先の大学では、教育学科で教鞭を取る一方で、図書館長を今年4月から務めています。また、図書館長が務めることになっているアカデミックライティングセンター長の職にも就いています。ほかに昨年4月に設置されたシンギュラリティ研究所の共同所長も引き受けています。私立大学として、生き残りのためにいろいろな手を打っていることがわかりただけだと思います。

私の専門は、図書館情報学、教育情報学ですが、なかでも情報リテラシー教育に関心を持ってきました。最近、情報リテラシー教育と学修支援を繋ぎながらいろいろ考えています。今日は、大学図書館の学修支援について、何をすればよいのか、何ができるのかということと皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。学修支援は、大学あるいは大学図書館によってそれぞれ在り方が違うと思いますので、結論ではなく、私見も含めて、論点を提示していければと思っています。

2. 大学図書館における学修支援

まず、学修支援が注目された背景を確認しておきましょう。現在は、大学進学率が5割を超え、少子化が進んでいるため、昔と比べると大学生の層が異なっています。かつては大学は研究の場であり、研究が教育に結び付いていましたが、現在は教育と研究は別のものと切り離す考え方もあります。図書館の役割も主に研究のためだったわ

けですが、いまは教育のための在り方を考える必要があります、登場したのが学修支援です。ラーニングコモンズという概念が日本に入ってきてから、ここ10年くらいでしょうか。いわゆる質的転換の答申が文科省から出され、教育の質保証、単位の実質化が求められるようになりました。授業時間以外に学修を支援する環境として図書館がとても大事になってきました。

研究支援の対象は研究者です。かつては教員だけでなく学生も研究の一翼を担っているとみなして、教員の研究成果を授業で聞いて、学生が学ぶというモデルだったと思います。いまは教員が自分の研究成果を授業で話すとは限りません。決められたカリキュラムがあって、教科書的なものがある、それを教えることもあるわけです。「大学の高校化」と言われることもあります——私は悪いことだとは思っていませんが。では、図書館は何をするか。かつては研究が上手くいくように支援していたが、いまは教育する先生や学修する学生を支援する必要があるということです。

学修支援というとラーニングコモンズをイメージする方もいらっしゃると思います。情報リテラシー教育というイメージの方もいらっしゃると思います。いわゆる指定図書といったイメージを持たれる方も多いいと思います。しかし、図書館はそもそも研究を支援していた——選書も排架もレファレンスサービスもすべて研究の支援を担っていたわけです。同様に、学生が学修するにあたって、特別なことをするというよりも、そもそもどういった選書をしておけば学修の支援につながるか、どういう排架をすれば学修の成果が上がるか、レファレンスサービスでどういう対応をするのが学修の成果に結びつくか、というふうに図書

館サービス全体が学修支援として見直されるべきではないか、というのが私の問題提起のひとつです。選書や排架の仕方にも学修支援的な観点があるのではないか、ということです。学修支援といっても、何か特別なことをしなければならないのではなく、図書館が行なっている基本的なそれぞれのサービスを、学生がより効果的・効率的に学ぶためにはどういう在り方が望ましいかという点から考えることだと思っております。図書館ができることは、図書館が持っている資源（リソース）を提供して、それが活用されるためにいろいろなサービスを行うということだと思っております。ここでいう「資源」とは、資料という意味ではありません。図書館には三つの資源があると考えたいと思います。「情報資源」は、いわゆるコレクション、データベース、電子的なものも含めた資料群です。「空間資源」は、いわゆるラーニングコモンズだけではなくて、一人用のキャレルとか書架とかも含めた空間です。「人的資源」は、ライブラリアンだけではなく、TAなどを含めたものです。また、利用者も含まれると思います。利用者同士が学び合うといったときには、利用者がお互いに資源となっていると捉えられます。最近の学生は、一人ではあまり勉強をせず、それぞれが別の課題をこなすときでも、食堂などで一緒に勉強しています。また、自宅ではなく、学校で勉強しています。2人や3人で教え合うような場面がけっこう見られます。学生同士も重要な人的資源ではないかと思っております。

3. “新しい学び”としてのアクティブラーニング

大学の教育は、いま、アクティブラーニングなどと言われていて、新しい方向に変わってきています。ごく簡単に確認しておきたいと思っております。教育の質保証に向けて、とくに授業時間内の新しい学習法としてアクティブラーニングに取り組むことになっています。単にグループ学習だけすればいいなどと思われているところもあるようですが、私なりにまとめると、次のような感じになると思います。

私は「参加型の学び」という言い方で学生に説

明しますが、まず、アクティブラーニングのポイントの一つ目は、何らかのアウトプットがあるということです。アウトプットとして、学生が何かしら書いたり話したりしたことがあると、周囲が反応できます。「そういう考え方もあるんだ」などという具合です。すると双方向性、多方向性が生まれますから、議論や意見交換ができ、新しい考え方が身に付いたりするわけです。これが二つ目のポイントです。伝統的なレクチャーでは知識の獲得、つまり「わかる」ことが目指されていますが、アクティブラーニングが目指しているのは「できる」ということ、つまり、能力の獲得なのです。これが三つ目のポイントです。

初等・中等教育では、「主体的・対話的で深い学び」とされています。「主体的」とはアウトプットのこと、教育学では「外化」という言葉を使います。思考なり感情なり意見なりを外に出すということを主体的と捉えていいと思います。外化されたものを他の人が見たり聞いたりする、つまり共有ができるので、対話が生まれます。自分では気づかなかったこと、先生の説明だけではわからなかったことでも、他の人はこう受け取るのか、こういう見方もあるんだ、というふうに学びが深まっていきます。「深い学び」というのは、能力の獲得に当たります。「わかる」ではなく「できる」ということ、知識を獲得するだけではなく、知識を創造したり、活用したりできること、これが「深さ」です。

もちろんこれは授業時間においても目指すものですが、授業時間以外も大事になってきます。学修支援といったときに、外化、共有のプロセスを図書館でもうまく実現できるような支援をしていくことがポイントになると思います。

アクティブラーニングは相対的な概念ですので、「ここから先がアクティブ、ここから先はパッシブ」ということではありません。例えば、レクチャーのスタイルでもアクティブにすることはできます。例えば、私の授業では、講義スタイルのときに配るレジュメは、ところどころが穴埋めになっています。授業を聞いて、「あっ、そういうことか」と、穴を埋めていかないとレジュメ

が完成しないようになっています。基本的にはレクチャーのスタイルですが、少しだけアクティブになります。グループディスカッションをさせる、プレゼンテーションをさせるといったことだけが、アクティブラーニングではないのです。「よりアクティブにする」という工夫が大事、必要ということだと思います。ちなみに、「間違い探し形式」をやっている先生もいらっしゃいます。レジュメのどこかに間違いがあるのです。授業を聞いて、間違いを直さないといけな——アクティブな学びになりますね。

アクティブラーニングはあくまで手段です。いろいろなやり方があります。グループのディスカッションは、講義教室ではなかなか難しい——隣近所ならばできますが、離れたところとグループを組んで座り直すといったことは難しいところがあります。そこで、書くグループワークをやったこともあります。紙に意見を書いて、後ろの人に回します。ぐるぐる回していくと、いろいろな人の意見を見て、それに意見を書き加えていく、これがことのほか上手くいきました。話すのはそんなに得意ではないが書くのは得意という学生もいます。また、紙なので、記録が残るため、後で共有がしやすいこともよかったです。アクティブラーニングは工夫次第かと思います。

図書館が学修支援を行うにあたって、学生がどんな学修をしているか、どんな授業を受けているか、といったことは、知っておかなければならないですね。したがって、アクティブラーニングの適切な理解は大事だと思います。授業ではどんな手法で学んでいるのかということを図書館が把握して、「それでは図書館ではどんな支援をしようか」ということにつながりますので……。いまひとつは、図書館が行う学修支援のなかで指導をしたり相談を受けたりというときにも——データベースの講習会などだけではなく、学生に何かを伝達したりする機会は、例えばマニュアルを置いておくとか、ウェブに説明を掲載するとか、たくさんあると思いますが、そういうときにも、アクティブラーニング的な考え方はとても大事だと思います。講習会で説明資料を用いて一方向で淡々

と説明するのではなくて、学生がより参加するようなスタイルを工夫していく、つまり、アクティブラーニング的な手法を取り入れていくということも大事だと思います。

4. 学修支援と情報リテラシー教育

情報リテラシー教育はやはり学修支援の中核だと思いますから、推進するべきだと思いますが、「何をどこまで」という点は少し考えなければならぬと思うようになりました。情報リテラシーを、ここでは「情報を活用する能力」と定義します。では、なぜ情報リテラシー教育が必要なのかというと、文献を探すのに検索しないといけな、検索の仕方がわからないと文献は手に入らないから、データベースの利用の仕方を習いましょう——これが情報リテラシー教育の一般的な考え方だと思います。必要な情報リテラシーのレベルがあるとして、そこに少し足りないなというときに、予めそれを教えておきましょう、学んでおいてもらいましょうということですね——OPACの使い方でも引用文献の書き方でも。あるいはわからないと言われたら、その場で教えて、学んでもらいましょう、という考え方もありますね。私はこれらについて体系的に図書館として取り組んでいくべきとずっと訴えてきました。いまでもその思いは変わらないのですが、何でもかんでも図書館でやるのかということには疑問を持っています。というのは、学修支援という枠組みができてきたからです。学生が学んでいくとき、授業のなかで、カリキュラムに沿って学んでいくなかで、必要な情報リテラシーとは何かを考えなければいけないと思うのです。

情報リテラシーについて、別の見方を挙げます。学生が「データベースの使い方がわからない」と言ったときに、「では、使い方を覚えてください」と教える以外に、できることがふたつあります。レファレンスサービスに来たときに「覚えなくてもいいから一緒に探そう」「それはこちらで検索してあげるよ」といった提案の仕方も可能です。さらに、情報リテラシーが足りなくても、文献が手に入るようにしておく、という考え

方も当然、あるわけです。「自分で検索して探してね」ではなくて、例えば、授業で使うことがわかっている文献については前もって用意しておくということもあり得るわけです。いわゆる指定図書制度もこれに当たりますね。いわば「予め防ぐ」ということになります。つまり、何でもかんでも情報リテラシーとして「これも学んでおいたほうがよい」というわけではないのではないか、図書館は「これを身に付けてほしい」と思っているが、本当にすべてが身に付けるべきことなのかどうか、問い直さなければいけないのではないかと思います。

その場で助ければすむことかもしれない、あるいはそもそも検索の技術がなくても文献が入手できるようにしておくことがいいかもしれない——学修のためには、そういうかたちでもよいのではないかと、ということです。本学でもデータベースの講習会とかライティングの指導とかを行っていますが——それらは学修支援の中核だと確かに思いますが——、大きな枠組みで考えていかないといけないと思うのです。つまり、情報リテラシーについて、私たちはふたつのことを重ねて議論してしまっているのだと思います。ひとつは、学生が、法学なり教育学なりを学んでいく手段としての情報リテラシー、いわゆるスタディスキルとかアカデミックスキルとかいうものです。もうひとつは学修の目的としての情報リテラシーです。いわゆる「学士力」などと言われているように、大学を卒業して社会に出ていくときに「このくらいのリテラシーを持っていてください」という場合です。つまり、リテラシー自体を学びましょうという意味の情報リテラシーです。これらはいったん分けて議論したほうがいいのではないかと考えています。

まず、前者の学修の手段として、例えば英文学を学ぶために必要な情報リテラシーについてです。例えば、授業で教員が、いくつかの文献を挙げて、このなかから文献を読んでレポートを書きなさい、と指示を出したとします。学生が図書館に行ったとします。初めて図書館を使う学生にとっては、「そうか、OPACでこれを検索しなきゃ

いけないんだ。どうやって使うんだろう？」となったとき、まずは利用法を身に付けられないことになってしまいます。その後には、十進分類法で並んでいることがわからないと、探しにくいかもしれません。他にも、貸出手続の方法とか、いろんなことを学んで身に付けられないと文献を入手するのがもしかすると難しいかもしれません。OPACの使い方やNDCによる排架法は、確かに教えておいたほうがいいと思いますが、例えば、大学1年生の初学者にとって、本当に予め必要でしょうか、ということを考えてみたいのです。

大学における授業では、最初は“taught型”の授業が多く配置されています。例えば教育学だと、最初は教育心理学とか教育思想とか、そういった基本的なところを学ばないといけません。「これくらいのことを学んでおいてくれないと、その先につながらないよ」と、私たち教員の側が「こういうことが大事だよ」と指定しているわけです。「このあたりの文献くらいは読んでおかないと困るよね」というふうに教員の側が決めることとなります。学問の最初ですから、学生が好きなものを選んで読むわけではなくて、「この分野だったらずはこれを読んでほしい」ということです——最たるものが教科書というわけですが。徐々に各論や応用に入っていくにつれ、それこそ自分でテーマを決めて研究する、卒論を書く、といった段階に至ると、自分で必要な文献を探していくようになってきます。社会で求められるのはこちらですね。最初は“taught型”から入って、徐々に“research型”の授業が増えていき、卒業時には自分でリサーチができるようになってほしいということです。

情報探索の観点でいうと、情報が適切なものか、必要なものかということ誰が判断するのかということです。“taught型”では、この情報が必要だ、適切だということは教員側が判断する、つまり他者が判断します。一方、“research型”では、論文やレポートに使う文献を探すときには、どれが自分にとって必要かを学生自身が判断しないといけません。いわば情報の評価の問題です。必要な文献、情報かどうかを評価するのが自

分か他人かということには大きな違いがあります。大学の初め頃に多い概論・入門の授業のときには、何を読むべきか、何が必要かということとは教員、カリキュラムの側が決めていく面が強いということになります。

例えば、選書や排架について考えてみます。“research 型”については、伝統的な大学図書館が研究をベースに進めてきたとおり、研究向けにコレクションをつくりますから、選書も「なるべく網羅的にたくさん集めておいたほうがよい」ということになります。ところが、“taught 型”、例えば、教育心理学概論などを学ぶときには「多ければ多いほどよい」というわけではありません。古い学説とか間違った学説とか難易度の高いものなどは、初学者にとってはむしろないほうがよい——必要なものが過不足なく揃っていることが適切ということになります。学校図書館は、間違っただのとか古いものとかがあるほうがまずいわけですね。大学も、高校までと必ずしも一緒ではないですが、過不足のない状態が適切な場合があるということです。

排架については、研究で自分に必要なものを探していくときは、系統的になっている、つまり十進分類法のようなものがとても大事です。ある分野において自分のテーマがどこに属しているといった把握ができることはとても大事なことだと思います。ただし、“taught 型”の場合は、学問的な体系性よりも、「こういう順番で学んだほうが身に付きますね」というふうに、積み上げ型のほうが効果があるはずですね。順序性、学修段階順ということでしょう。伝統的な図書館のコレクションは“research 型”を前提にしているわけですが、“taught 型”では「こういうものをこういう順番で読んでいくといいね」ということが、ある程度、決まっているわけですから、“research 型”とは別のところにコレクションを設けてはどうか、と考えています。

具体的には、授業のなかで教員が「これが教科書だよ」「これは参考文献だよ」、あるいは「このリストからこの辺を読んでおくといいよね」と指定したものとします。それらについては、

授業ごとに揃えておく、という考え方です。余分なものは置かずに、必要なものだけを置く。履修者が多ければ少し多めに複本を揃えて、できれば禁帯出にして、いつでもそこにあるようにする。——どうでしょうか。“research 型”は貸出をしてしっかりと読んでもらう。“taught 型”は、いつでも学習内容にアクセスできるようにする。伝統的な図書館のコレクションとは逆をやることになります。維持管理は大変です。伝統的には一度、排架したら動かしません、が、“taught 型”は、授業内容が変わるたびにコレクションも入れ替わっていきます。指定図書のように、一部の先生が指定したものだけを置くのであればなんとかなると思いますが、授業ごとにすべてやろうとすると、授業の内容をフォローしなければならないので大変です。ただ、特に学問の基礎をつくっていく段階では、自分で難しい専門書のなかから英文学入門の本を探し出すことにはそれほど意味はないと思うのです。最初の段階では、入門編を読み、次にこれとこれを読んでいくと、英文学の基礎は身に付きますよ、そうすると、ある程度、学問の全体像が見えてくるので、NDCのように体系化されたなかから、自身の興味に応じて探していくことができると思うわけです。こうした学修コレクションは、小規模ですが、すでに実施されている図書館もあります。

情報リテラシーの話に戻せば、「予め防ぐ」ということになります。「リテラシーがなければ学ぶことができません」ではなくて、リテラシーを身に付ける前に、まずは学修内容をフォローできるようにしておきましょうということです。リテラシーは、あとから身に付けていけばよいのではないか、必要なときに身に付ければよいのではないかという考え方です。

もちろん予め教えておくべきだということもあると思います。例えば、レポートの書き方、論文の書き方、そのための文献の集め方などは、確かにいろんな授業で適用できますから、学んでおいたほうがよさそうです。とくに社会に出てからも、書く力、調べる力は必要ですから、リテラシーとして重要だと思うのですが、「いま」必要

かどうか、ということは見直さなければいけない時期かと個人的には思っています。

そもそも授業や図書館、ライティングセンターなどで教えていることで、本当にレポートや論文がきちんと書けるようになるか、という問題もあります。余分なことや抜けや漏れはないか……。レポートや論文はこういうふうにすれば書けますよ、ということは、私もあると思っていました。そういう教材もつくりました。ただ、本当に「一般的」なレポートや論文の書き方のノウハウみたいなものはあるのでしょうか。学問分野、先生の教え方、主義・主張によって、書くべきレポート、評価されるレポートは違っているのではないのでしょうか。「一般的」なことは教えられますが、それが必要十分かどうかというと、もしかすると違うかもしれないと思うところがあります。

さらに、レポートや論文以外でも学修の評価は行われます——テストとか授業中の発表とか。それらの支援はどうすればよいのでしょうか。もしかすると、レポートや論文の書き方ではなく、例えばノートの取り方が大事かもしれません。テストの対策はどうでしょうか。レポートで評価する授業もあれば、テストで評価する授業もありますから。「このあたりの文献を読んでおきなさい」と指示を出して、文献の内容がテストに出るようなケースは、図書館はどのような支援ができるのでしょうか、あるいは、支援をすべきでしょうか。

10年近く前にイギリスにいたときの話ですが、イギリスの大学図書館は、テスト対策を行っていました。レポートで評価する授業はレポートの対策講座を、テストで評価する授業についてはテストの対策講座を図書館がやるのです。合理的に考えれば、同じように文献を使ってレポートかテストかという評価の違いだけならば、どちらもやりましょうということです。

あるいは、プレゼンで評価する授業に対しては、どうでしょうか。どう支援すればよいのでしょうか。あるいは、文献を読んでおいて、授業中には文献に基づいた講義を聞く——いわゆる事前学習、語学の予習が典型ですね——、図書館はどのような支援ができるのでしょうか。支援できるこ

と、学修支援としてできること、学修支援としての情報リテラシー教育でできることは、けっこう転がっているのではないのでしょうか。

このように考えていくと、どのようなスキルを身に付けてほしいかは、カリキュラムの段階から設計が必要となります。図書館単独で考えるというよりも、カリキュラムのなかにある程度組み入れる必要があります。ただ、図書館が働きかけて組み入れるのは難しいので、カリキュラムを見て、どの段階でどういうことができればよいかを把握して、図書館としての情報リテラシー教育を展開していかないといけない、ということだと思います

学修手段としての情報リテラシーについては、カリキュラムがどうなっていて、学生がどのようなスキルを身に付ける必要があるか、現状とどういいうギャップがあるか、という分析が必要だということ。また、図書館だけでは完結しない場合もあります。そこは情報センターがやりますよ、あるいは授業で教えますよ、ということもあると思います。情報リテラシー教育は図書館がすべてやるのではなくて、大学全体でやることですから、図書館が本当にやるべきこと、図書館でなければできないことは何かを取捨選択をしていく必要があると思います。

学修の目的としての情報リテラシーについてです。卒業時に必要な情報リテラシーは、「学士力」では汎用的な能力と位置づけられています。もちろん重要だと思います。各大学で教育目標として持っているはず。ただ、そうはいっても、具体的に何ができれば、情報リテラシーが身に付いていて社会で役に立つといえるかは、必ずしも明確でない気がします。学部を横断して必要なものなので、まずは図書館として全体像を考えるべきかと思います。ただ、先ほどもお伝えしたとおり、情報リテラシーは文脈に依存するところが多いと思いますので——例えば、レポートの書き方でも、ある分野ではこう書くけれども、別の分野ではこう書くだろうと、だから、こちらではデータベースを検索しなければいけないけれど、こちらでは検索しなくてすむねということかもしれな

い——、一般的に分野を問わずに通用するような情報リテラシーは、じつはそれほど多くないのではないかと思うのです。

また、技術に依存するところもあります。例えば、20年前の情報検索の教科書は、件名標目とかがけっこう丁寧に書いてあります。AND 検索、OR 検索、NOT 検索の組み合わせも時間をかけて教えるようになっていきます。しかし、最近は、とりあえずキーワードを入れて検索結果を見て再検索をしていく、というやり方が主流になっています。むしろ、検索結果の評価のほうに軸足があって、いかにきれいに検索式を組むかというところは、昔に比べると比重が下がっています。情報リテラシーとして身に付けておかなければいけないことは技術にかなり左右されていると思います。

また、本当に身に付けなければいけないことは置き去りにされているのかもしれないという気がします。例えば、こういう経験があります。OPACで検索した結果、上位の文献だけを読むという学生に当たったことがあります。Googleだと上のほうに「それらしい」ものが並ぶので、上のほうほど大事だという感覚があるのでしょうか。ただ、OPACには適合順に並ぶような機能はありません。出版年の古い順に出力すると、古いものから読んでしまうことになります。私の指導も悪かったと思いますが……。

何が言いたいかということ、検索の技術、テクニックよりも、自分にとって必要、重要な文献は何かという評価、判断の仕方のほうが、技術動向に依存しない、大事なところなのではないかということです。OPACのように評価が予め入っていないものを自分で評価するときにはどうすればよいかということです。Googleで何が上位になっているかも評価の話に含まれると思います。

最近、けっこうショックだったことですが、ジャーナルに掲載されている論文という概念がない学生がいました。CiNiiで検索する、論文が表示される、読んで発表する——そこで、「これは何を讀んだの」と聞いたときに、皆さんならば、当然、あるジャーナルに掲載された論文だとわかるわけですが、学生は、CiNiiを検索して、全文で表

示されたその論文だけを見ているので、「ネットで検索したら出てきました」という理解なのです。「それは、ジャーナルに収録されているもので……」と説明すると、ジャーナルを使ったことがないからわからないということがわかりました。これも技術の問題で、電子化される以前はこういうことはあり得なかったわけですが、いまはダイレクトに検索結果に全文が表示されるので……。では、何を学んでいけばよいかというと、おそらく、学術情報がどういうふうに通じているかということかだと思います。図書やジャーナルがあり、ジャーナルもレフェリーのあるものとなんともあり、編集されて私たちのところに届いてきているという、学術情報流通の全体図のようなものを学ぶべきときになっているのですね。

5. “ラーニングコモンズ”としての大学図書館

ラーニングコモンズとしての大学図書館についてお話したいと思います。ラーニングコモンズとは、グループ学習ができて、PCも置いてあって、というイメージですが、何のための学習（ラーニング）なのか、ということ少し考えてみる必要があります。いろいろなラーニングがあってよいのですが、今回は学修支援、つまりカリキュラムに沿ったラーニングはどうあるべきか、何のためにコモンズをつくるのか、ということですね。最も重要なことは、そこに人が集まるということだと思います。ラーニングコモンズとしての図書館、学びの場としての図書館は、人が集まって学び合う、一人ではできないことができる、というところに意味があると思うのです。図書館自体が学修の場、もっと言えば、大学自体が学修の場、ラーニングコモンズだと思うのですが……。

図書館が持つ三つの資源（リソース）を先ほど挙げましたが、それぞれ単独ではなく、学びの場としての図書館、学修支援の場としての図書館であるには、三つのリソースが全部揃っているところに意味があると思います。三つを上手く結び付けた活動ができてこそ意味があると思うのです。言い方を変えると、図書館でしかできないこと

は、三つの資源を有機的に結び付けることだと思います。学校の授業を想像してみてください。学校の授業が成立する、教えと学びの関係が成立する要素には、三つがあります。「教師」「教材・教具」「教室」、つまり、人とモノと場所です。図書館には三つが全部揃っているのです。人的資源、情報資源、空間資源です。学ぶ教材はたくさんあります。学ぶための空間も用意されています。そしてサポートする人もたくさんいます。三つが上手く繋がると、学びが成り立つ。図書館はこれらを組み合わせて使うところに意味があります。commonsとしての図書館の意味はここにあります。だから、ラーニングcommonsを図書館に併設して「ここは賑やかにしていいよ」というだけではあまり意味がないかもしれない。場所を用意することにも意味はありますが、それだけでは効果は必ずしも充分ではない。そこに人とモノを組み合わせることで初めて、図書館ならではのことができるのではないかと思います。

例を挙げてみます。例えば、先ほど学修コレクションの話をしました。語学の授業は、予習が大変ですよ……。そこで、「語学の授業の予習をしましょう」という勉強会というか読書会を催すというのはいかがでしょうか。授業の履修者に対して、「何月何日の何時からここで勉強会・読書会をするよ、だから来たい人は来てね」と伝え、集まった学生同士が「この単語の意味、調べただけで難しくてわからない」などという情報交換が行われる。そうすると、場所がある、人がある、資料がある、三つを組み合わせることができます。学び合いが生まれていくと思います。

ほかに、レポートの課題を分析する会——あの先生はこういう本を書いている、こんな論文を書いている、だからあの授業で言ったこの課題は、きつとこういうことを書かせたいんじゃないかな、というような分析の会をやるというのはどうでしょうか。試験対策はどうでしょうか。先ほどもお伝えしましたが……。あの先生が書いた文献はこれ、授業で指定したものはこれだから、これらをどう読み解くか、どんなところが大事か、ということと一緒に考えていくというこ

となのですが……。ほかに、レポートや授業のプレゼンの成果を図書館に展示するのはどうでしょうか。あの授業で、先輩方が書いたレポートはこういうものですよ、と展示してみる。あのゼミで発表した内容はこうですよ、プレゼンのポスターはこれですよ、ということがわかる。これはこれで学び合いが生まれますよね。レポートやプレゼンで使われた文献も一緒に置いておくとよいと思うのですが……。先ほどお話しした学修コレクションと併せてやっていくとよいのではないかと思います。

6. おわりに

学修支援という枠組みでみると、図書館のサービス自体、サービス全体が学修支援なのです。学生の目線から見て、学修効果をより高めていくためには、サービスがどうあればよいかを考えるべき時期であるということです。そして、やはり重要なのは情報リテラシー教育とラーニングcommons的な考え方だろうと思います。ただし、本当に必要なか、ほかに必要なものがあるのではないかと、サービスを全体の見直しという観点から、いわば棚卸しをしていく、検討していく時期を迎えていると思います。情報リテラシー教育やラーニングcommonsをめぐって、理論的な裏付けが薄いままだったところがあると思います——私も反省すべきところなのですが。いまは理論的な裏付けというか、軸があります。軸というのが学修支援なのです。学生がカリキュラムを段階的に学んでいくためには、どういう情報リテラシー教育が必要か、どういうラーニングcommonsが必要か、さらには、どういう選書がよいか、どういう排架がよいか、どういうレファレンスサービスが望ましいかということの説明できるわけです。ちょうどいま、転換期かと思っています。

話が拡散しすぎて大きくなり過ぎたかと思いますが、必要があれば個別に、あるいはこのあとご質問をいただければと思います。ご意見やご批判もぜひ伺いできればと思います。時間をオーバーして申し訳ありません。ありがとうございました。

青山学院大学アカデミックライティングセンターの活動について

青山学院大学教授・図書館長・アカデミックライティングセンター長

野末俊比古

1. はじめに

青山学院大学アカデミックライティングセンターについて紹介する。立ち上げから関わっているが、現在はセンター長の立場となった。詳細は、ウェブサイトに掲載されているので、そちらもご参照いただきたい。

2. 設置の背景と経緯

アカデミックライティングセンターを開設した理由のひとつは、グローバル化への対応である。留学生に対して日本語のライティングをサポートすることが必要だという背景があった。「AOYAMA VISION」という方針におけるグローバル化の枠組みのなかで、特別予算を申請して立ち上げを行なった。学内のどこに属するのが適当かが検討された結果、図書館に設置されることとなった。

2017年10月に青山キャンパスに設置し、専任の助手2名と委託職員でスタートした。翌年4月には助手を1名増やし、相模原キャンパスにも設置した。本年4月にはさらに助手1名を配置し、両キャンパス助手2名ずつで運用している。全国的にもこれだけの専任スタッフを置いているのは珍しいと思われる。

なお、センターでは、留学生だけでなく日本人学生も対象としている。日英両言語のライティング相談に応じている。

3. 活動の方針と実際

運営にあたっては、運営委員会と実務委員会が設けられている。助手は直接の指導には当たらず、研修を受けた大学院生のチューターが学生への支援を行なっている。センターの理念は自立し

た書き手を育てることであり、本人が気付き、本人が書いていく、というかたちを取っている。チューターが対話を通じた支援を行い、助手は何かあればサポートをする。

セッションは、授業期間中の月曜日から金曜日に1枠45分で設定されている。オンラインで予約ができる。授業のレポートとは限らず、学術的なライティングであれば対応する。

実際には、文章の構成や引用の仕方などの支援を行なっている。研究の中身に立ち入ることや就職関係の文書作成などは支援の対象外である。

青山キャンパスの実績を紹介しておく(青山学院大学アカデミックライティングセンターウェブサイト [<https://www.agulin.aoyama.ac.jp/writingcenter/>])。初年度(半期のみ)は34日間の開室に対して66件の利用があり、2018年度後期は、77日間の開室に対して261件の利用があった。学生が普段は通行しない場所にあるにもかかわらず、利用率は高い。利用者の学部・学年も必ずしも偏っておらず、順調な運用ができています。経験豊かな教員が就任し、上手く広報もされていることなどが要因だと考えている。

4. 課題と今後の展望

課題を挙げておく(小林・中竹「ライティングセンター運営上の現状と課題」『青山インフォメーション・サイエンス』46(1), 2018)。授業に関するレポートなどの相談が多いため、ニーズの多い時期と少ない時期とで波があり、どこにリソースを投入するかが難しい。広報についても、利用を増やしたい一方で、受入れの枠に上限があるので、加減が難しい。授業との連携なども課題として挙げられる。

課題提出期限までの残日数を調べたデータによれば、「あと0日」が15%、「あと1日」が20%となっており、「あと2日」まで含めると全体の44%、「3日前」までで55%となる。学生は、提出期限間際になって相談に来る傾向にある。センターはできあがったものをチェックする場ではないので、広報の仕方にも工夫が必要となる。また、支援の内容を見ると、文章の構成、課題の内容把握、文章の展開、引用の仕方、参考文献一覧の書き方などが上位に来ている。ニーズを見極めて、来室時期の指導を考えることも今後の課題となる。

5. おわりに

ライティングの中身にはタッチしないが、中身が分からないと支援できない部分もあるのが難しいところである。支援によって成績評価が上がることは望ましいと思うが、成績評価にどこまで関わってよいのかは検討しないといけない。また、図書館の一部門として設置した意義をどのように見出していくかも議論していきたい。

なお、本報告は、報告者の認識に基づくものであり、私見を含む。所属組織の見解を代表するものではない。

学生協働による学修支援活動

— 静岡理科大学附属図書館の取り組み —

静岡理科大学附属図書館 課長

岡 部 恵 理

はじめに

本日は、本学図書館で行っている学生協働による学修支援活動を中心にご紹介いたします。

小規模大学図書館ですので、目新しい内容ではないと思いますが、ご参考になればと思います。

1-1. 静岡理科大学の概要

所在地は静岡スタジアムに近い静岡県袋井市で、平成3年4月に創立されて以来28年になります。理工学部、情報学部の2学部6学科からなり、理工学部には2年前に建築学科が開設されました。大学院として理工学研究科があり、システム工学専攻と材料科学専攻からなります。学生数は1,591人で、学部1,560人、院生31人、教員数は120人となっています。

1-2. 附属図書館の概要

開学と同時に開設され、教育棟4階の1フロアが図書館です。平成23年には、館内の改修工事を行いラーニングコモンズが設置されました。1フロアに静粛空間と活発空間(ラーニングコモンズ)とがあり、ゾーニングには苦労しました。学修支援は、そのラーニングコモンズ内で行っています。

所蔵冊数は、約12万冊、電子ブック192タイトル、雑誌978種、電子ジャーナル約2,336タイトル(パッケージ含む)、座席数は254席で、職員は常勤2名、非常勤2名と夜間担当1名で運営しています。

学生スタッフは、学修支援をする図書館コンシェルジュが9名(報酬あり)と、本の選書など読書推進活動をするLA26名(ボランティア)が図書館内で活動しています。

開館時間は9時から20時まで、平成30年度の貸出数は、12,520冊、学生1人当たりの貸出冊数は約7冊となっています。2年前から英語多読本が授業での課題となり貸出冊数が増加し、また英語多読の電子ブックを購入してから、これまであまり利用されていなかった電子ブックの利用件数も急激に増加しました。

2. 図書館職員による学修支援

①新入生向けの図書館ガイダンスを、前期の「フレッシュマンセミナー」15コマ授業の内、1コマを利用して行っています。内容は、図書館利用説明、館内ツアー、資料検索法に加えて、図書館脱出ゲームを取り入れたアクティブ型のガイダンスを行っています。3・4人がグループとなり協力して3つのミッションをクリアしていきます。最終問題では、問題テーマに沿った本を各自1冊検索し、その本を探して借りてくるといった内容です。今年度の実施状況としては、補講2回を含め27回開催、職員4名とコンシェルジュ学生が対応し、428名が受講しました。人数が多いため実施時期が7月までずれ込んでしまい、早いタイミングでの受講ができない学生がいることが課題でもあります。

②文献検索のキホン講座を前期・後期の募集で各3回程度、依頼により研究室やゼミ単位での開催も行っています。対象は2年生から4年生で、文献の見方・探し方、データベースでの文献検索等の内容を実施しています。

③SciFinder講習会では、外部講師を招いてデータベースの講習を行っています。

3. 学生による学修支援：図書館コンシェルジュ

①図書館コンシェルジュとは

平成23年、ラーニングコモンズ設置に伴い、相談コーナーを設けて学生（図書館コンシェルジュ）による学修支援を開始しました。目的として、図書館での学修支援機能を充実させるとともに、学生の自主性・主体性の育成を図り、更なる成長を促す、学生協働による学修支援の実践です。

人選は、教員からの推薦に自薦も含めて10名程度、対象は大学院生・学部2～4年生になっています。院生と4年生を集めたいところですが、院生の数が少なく、4年生は就活・卒研等で忙しいため、2、3年生が中心となっています。活動期間は前期と後期に分かれ、月曜日から金曜日の1日3コマで、コンシェルジュコーナーに学生が待機し、学習相談を行っています。研修として、図書館の利用方法やコンシェルジュとしての心構えなども含めた事前ガイダンスを1コマ、活動期間中に参考文献の見方や書き方、データベースの検索方法を学ぶための「文献検索のキホン講座」を必ず受講してもらっています。

②コンシェルジュの主な活動

今年度前期は、学生スタッフ9名で、62日（177コマ）の活動を行いました。

学習相談は、図書館利用方法、文献検索、授業の課題、レポート相談、ワード、エクセルの使い方など多岐に渡り、相談者と一緒に考えながら課題解決をしています。前期の学習相談は66件で、授業の課題についての相談が一番多く、1度訪れると何度も相談にくる学生もいます。

学習相談の他に、相談者のいない空き時間を利用して、図書館業務補助、講座・イベントの開催、広報活動、学外活動等も行っています。

図書館業務の補助としては、返却本の配架や書架整理があり、専門外分野の資料にも触れることにより、図書館のことをより広く学んでもらうためです。また、1人3冊以上の選書をしてもらい「コンシェルジュが選んだ本」コーナーにPOPを付けて展示しています。学生目線で選書された本は、貸出件数も多く学生達に親しまれています。

その他図書館ガイダンスの補助、中学生職場体験の補助、季節の飾りつけ等も行っています。

講座・イベントは、学習や学生生活に役立つ内容を学生達で企画・運営し、月1回のペースで開催しています。前期にはExcel講座2回、C言語プログラミング講座2回を実施。過去においては、プレゼン講座、テスト勉強会、ビブリオバトルの実施等々、積極的に行っています。

広報活動は、「図書館コンシェルジュ News」（A4・1枚裏表）を広報紙として月1回のペースで発行し、スタッフ紹介、コンシェルジュおすすめの本の紹介、講座等の告知と実施報告等を掲載しています。その他、SIST Blogへの記事掲載、Twitterでの情報発信、宣伝ポスターの制作・掲示等、コンシェルジュの認知度を高めるための活動をしています。

学外活動としては、パシフィコ横浜で開催される「図書館総合展」のポスターセッションと全国学生協働サミットに毎年参加しています。ポスターセッションでは、自分達で制作した活動紹介ポスターを展示し、来場者への説明をしています。全国学生協働サミットでは、フォーラム等に参加し他大学の学生達との情報共有や交流を図っています。その他、学外者向けのポスター作製、ピアサポーター合同企画「実践で学ぶ社会人基礎力向上講座」開催、近隣の大学図書館を訪問する大学間交流なども行っています。

4. LA (Library Associate) 学生による読書推進活動の紹介

こちらは、平成11年に発足し、学生の選書による『楽しむコーナー』の充実と学生主体の読書推進を目的とした学生のボランティア団体です。

活動内容として、委員会の開催、選書活動、『図書館だより』への寄稿、選書ツアーへの参加、読書会やPOP制作会の開催、「全国学生ビブリオバトル」地区予選会開催等、様々な活動を行っています。

5. 課題・これから

今後の課題として4点。①相談者を増加させる

ために、図書館コンシェルジュの認知度の向上を図る。図書館に来ない学生にもアピールをしていく。②人員確保と業務の継続・後輩への引継ぎ。4年生・院生など上級生の確保、メンバーの入れ替えがある中での人員の確保と業務の継続・維持が難しい。③学生主体の活動への導き。個々のモチベーションの違い、仕事としての責任感・自主性などを維持しつつ活動へ導いていく。④情報共有を円滑に。職員と学生、学生同士による情報共有の徹底。

学生同士が互いに成長できる場として、また学生のニーズを知る機会として、学生協働による学修支援活動があり、それが図書館サービスの向上・活性化に繋がればよいと感じています。

科学に関する展示の試み

静岡文化芸術大学図書館・情報センター長

的 場 ひろし

静岡文化芸術大学の図書館で行った「科学に関する展示」の試みについてご報告します。

「科学」は、我々の生活を明るく照らし、我々が抱える課題に立ち向かうための力を与えてくれます。文化政策学部とデザイン学部の二つの学部で構成される本学は、一般の総合大学にあるような「科学」の科目群は持っていませんが、学生が「科学」に興味を持ち、理解を深めるための機会を、できるだけ提供したいと考えてきました。そこで、本学の図書館において2018年度より、館内の展示スペースを活用した「科学に関する展示」を実施することにしました。その第一回の試みとして、「電磁波」をテーマとした展示を2019年3月から6月にかけて行いました。



展示の全体像

電磁波は波長の違いによって、電波、赤外線、光、紫外線、X線等、様々な名前で呼ばれていますが、これらは全て電磁波です。電磁波に多様な種類があるように見えるのは、電磁波自体に異なる構造があるのではなく、我々の身体を含めて地球上に存在する様々な「物質」が、それぞれ特徴的な構造を持っていて、特定の波長の電磁波に対して特定の反応を示す性質を持っているからだ

と言えます。そして、電磁波の話題は、「生物学」「物理学」「化学」「工学」等、様々な学問領域にまたがっています。

電磁波は、地球上の生物そして我々人類の進化にも大きく関わってきました。人類は、様々な波長の電磁波を発見し、自らの力でそれらを生み出す方法を開発し、そして巧妙に活用することで現在の我々が暮らす便利な世界を作り出しました。電磁波は我々の生活に無くてはならない存在となっています。

本プロジェクトの目標は、このような多様性を持つ電磁波の全体像を一望できる、大きな規模の展示を実現することです。そのために、主に屋外の横断幕等の用途に使われるターポリンという素材で横約7m、縦約1.3mのシートを作り、電磁波に関して文章とイラストで構成した約70件のトピックスを、「波長」と「歴史」二つの軸で整理、配置して図表を作成しました。この図表の作成では、本学の近隣に位置する静岡大学の三村秀典教授と浜松医科大学の針山孝彦特任教授に監修をお願いしました。



図表の一部

図表を見た人が、興味や疑問を感じたポイントについてさらに調べることができるように、図表の前にテーブルを置き、図書館の蔵書から「電磁波」に関する比較的読みやすい書籍を50冊選び、自由に閲覧できる形で陳列しました。その他にも図書館には様々な書籍が配架されているので、陳列された書籍を読んで、もっと深い内容を知りたくなった場合には、館内を少し歩くだけで、より専門性の高い書籍にアクセスすることもできます。



陳列した書籍

この展示の関連イベントとして、展示の前の通路スペースの一部を活用して、高校生と大学生約20名を対象としたミニレクチャーとワークショップを5月11日土曜日（開館中の時間）に実施しました。参加者は、図表の監修者である三村教授、針山特任教授ら講師によるレクチャーを受講した後に、電磁波に関するトピックスを自分で選び、図書館の蔵書等を利用して調査を行い、講師のアドバイスを受けながら、文章とイラスト



講師によるミニレクチャー

を作成し、新たなトピックスとして図表の中に貼り込む作業を行いました。



ワークショップにおいて、自分の選んだ新たなトピックスを貼る参加者

本展示に接した来館者やイベント参加者等の多くの方から好評を得ることができました。今後も、図書館にふさわしい啓蒙的なイベントとして、「科学に関する展示」を継続していきたいと考え、現在次回のテーマを検討中です。

パネルディスカッション

— 大学図書館の学修支援 —

パネリスト 野 末 俊比古 (青山学院大学)
 岡 部 恵 理 (静岡理科大学)
 的 場 ひろし (静岡文化芸術大学)
 モデレーター 林 左和子 (静岡文化芸術大学)

(林) 図書館の学修支援について、気になっておられる方が多いと思います。実際に行う上で、工夫されていること、問題と感じておられることを、パネリストの方にお話しただけでないでしょうか。

(岡部) 静岡理科大学では、2年前に建築学科が新設されました。図書や学術雑誌等、先生方と協議し必要なものを受け入れていますが、学生が課題を持って図書館を訪れても、実際にはそのテーマに沿った資料が数点しかないという状況がありました。図書館の蔵書を把握せずに課題を出されることもあるので、先生方に問いかけをしていかないといけないと思います。特に新設学科については、手探り状態で進めているところです。先生との連携に問題、課題を感じています。

(野末) 各大学の図書館の皆さんも、同じような経験をされているのではないかと思います。私も以前、図書館で調べてみようという課題を授業で出して、図書館に迷惑をかけたことがあります(笑)。学修コレクションについて先ほどお話ししましたが、実現するには、各授業でどういう課題が出されたかを把握する必要がありますので、教員と図書館との連携の仕組みを作る必要があると思っています。先生方から図書館に予め言ってくださるとよいのですが、なかなかそうもいきません。各授業の履修者に協力を仰ぐとか、学習管理システムを活用るとかいった方法も考えられると思います。

(的場) 図書館をうまく教育に取り込まないといけないなと思っています。教員によりませんが、デザイン学部では、実習系の授業が多く、実習の際に必要な各種資料は教員が最適と思えるものを自分でデザインしてしまうという傾向がありました。ただ、図書館の資料が有効活用できるケースもありますので、図書館との連携を促したいと思います。

(林) 的場先生が教育で活用されているプログラミングの関係で、図書館に対するご注文はありますか。

(的場) プログラミングのレファレンスになるような本の最新のものを、たくさん用意できるとよいです。履修者全員がプログラミングする際に手元に置いて使う本は、最新のものにしていく必要があります、買って数年経つと使いにくくなるので、そういう本が図書館で常に用意されているとありがたいと思います。

(林) 逆に古くなった本はその分野の歴史を知るのに役に立ちます。最新の本と古い本の提供方法について、ご提案はありませんか。

(野末) 大学によっては、実用書、資格試験などの本は、消耗品扱いとなっているのではないかと思います。授業で使うプログラミングの本は、一般の書架に配置されていることもあると思います。歴史的に遡って調査をするのか、最新のプログラミングについて学ぶのか、といった授業の目

的にもよると思います。古い本が支障になることもあるので、学習効率の観点から言うと、棚を分けるなど、学生が混乱しない仕組みがあるべきかなと思います。各大学で工夫されているところがおありかと思います。

(林) 続いて、学修支援への電子書籍の活用についてお話をおうかがいしたいと思います。

(野末) 電子書籍は、同時に複数の学生が使えることに意味があります。皆がアクセスできるという点で、電子書籍は効果的です。ただ、明らかに課題もあります。人文社会系である青山キャンパスの図書館にある蔵書のうち、電子版がある書籍はわずか3%程度でした。実際に活用するには電子化率が低いのです。

(岡部) 授業では積極的に使われていないと思います。電子書籍購入当初は、ダウンロードされない、認知されていませんでした。ただ2年前から電子ブックの英語多読本を入れてから、利用する学生が増えました。授業で電子ブックを使うことが増えれば、学生にも普及しますし、先生方にも知ってもらえると思います。ただ出版社による電子ブックの提供率が低いいため必要なものがなく、実際には難しいです。

(林) ここから、会場からいただいた質問について、ご意見をうかがいたいと思います。

まず第一、他大学で、小中高でグループワーク慣れをしていて、「またグループワークか」というような反応の悪い学生が出てきていると聞きますが、そのような経験はありませんか、というご質問です。

(野末) 良い影響もあると思います。つまりグループワークに慣れているので、授業が上手く進む面もあると感じています。「またグループワークか」という学生もいると思いますが、課題や目標設定の仕方によって興味・関心を引けば、上手く進むと思います。レクチャーとグループワーク

では、どちらがよいかを尋ねた調査によると、レクチャーを選ぶ学生が多いです。グループワークも工夫次第かなと感じます。

(岡部) 本学学生には、グループワークへの飽きや慣れは感じられません。

(的場) 自分が関わっている授業でも、その他の授業でも、グループワークはバランス良く実施できているケースが多いと思います。ただ、クリエーターの気質として、一人でやりたいという学生は必ず何人かいます。グループワークで力が発揮しにくい人がいるというのは、特別なことではないと考えています。

(林) 補足ですが、本学の学修支援システム「manaba」では、パソコンを使ってのグループワークが可能です。対面して話しをするのは苦手だけれど、パソコン上なら話しやすいという学生もいます。

(林) 第二の質問です。初学者に対して、リサーチ力を付けさせるリテラシー教育はあり得るでしょうか、というご質問です。

(野末) 初学者向けの入門科目においてリサーチ力を付けさせるリテラシー教育の取り組みは、多くの大学で行われていると思います。本学の教育学科の場合、基礎演習というリサーチ中心の演習科目があります。最初の段階からリサーチの要素は入り得ると思います。ただ、リサーチ的な能力として何が必要か、何から学び始めるか、という体系化が、大学としてまだしっかりできていないと思います。

質問に、初学者全員が履修する科目で、指定された新書の書評を書いて学生同士が評価し合うという試みのことが書かれています。とても良い取り組みだと思います。情報を読み解き、伝えるというところから入るのが、リサーチ能力のコアのひとつになると思います。参考になる事例で、私も真似しようかなと思います。

(林) 参考資料として、岩波ジュニア新書『はじめての研究レポート作成術』をご紹介します。東北大学の沼崎一郎先生の著作で、レポート作成、文献を批判的に読む、テーマを探すには等の内容が詳しく書かれていて、初学者のためのリサーチ入門になります。

(林) いただいている質問は以上ですが、会場の方からの質問や取り組みの紹介等がありましたら、挙手をお願いします。

(会場) 青山学院大学ではチューター、静岡理工科大学ではコンシェルジュが、研修を経て実際に業務を行っているとのことですが、その研修内容を教えていただけたらと思います。

(岡部) 静岡理工科大学では、コンシェルジュを初めてやる学生に対しては、事前ガイダンスを90分程行っています。図書館の基本的な利用の仕方、相談を受ける上での心構え、相談以外の業務についての説明等を、1時間半程行っています。その後「文献検索のキホン講座」を必ず受けてもらい、データベース、参考文献の見方、引用方法等を学んでもらいます。あとは、日々指導をしています。

(野末) ライティングセンターの場合、約1ヵ月半、20コマほどの研修をみっちり行なっています。春休み、夏休みを使います。ライティングの知識の他、相談にどう対応するか、課題の引き出し方、指示の出し方、気付かせ方、伝え方等、実技的なことに時間の多くを使っています。ライティング支援は添削ではなく、構想の段階、推敲、執筆のどの段階でも相談を受けるので、そのくらい時間をかける必要があります。研修中も給料は支払っています。

(会場) そういう活動は、助手の方より経験を積まれた先生方にも、大いにやっていただけたらと思います。良い文章を書かせる訓練は、戦後の日本の大学教育の中であまり重きを置かれていな

かったのです。英語ならそれを日本語に作りなおして、両方分かる人が読み進めると理解できるという記述の仕方が、人文社会系では今も残っているわけです。お話を伺っていると、大変大きな仕事になっているようなので、院生、助手だけにしない工夫もしていただけたらいいと思います。

(野末) 先生方をどう巻き込めるかは、重要なポイントとして認識しています。協力してくれる先生方も増えているので、広がっていくとよいと思っています。

(会場) ライティングセンターの指導方法について教えていただきたい。文章がおかしいということは指摘できても、どのように指導したらよいか分からない。定期試験で文を書かせるが、文章が下手で点数をつけるのも難しい。どのように指導すればよいか、教えていただきたい。

(野末) 例えば、一般的にはこうけどどう思うかな、などと伝えて気付かせる、といった方法も考えられると思います。テキスト的なものを見ながら相談に乗ることもあります。

(会場) 図書館の学修支援とは異なりますが、学生には英語力を上げる前に、日本語を書く能力を上げてほしいと言いたいと感じています。

(野末) 学生に接している感覚ですと、日本語を書く力は落ちてきている印象があります。ライティングセンターでは、個別相談だけでなく、セミナーのかたちでも論文の書き方などを伝えています。

(会場) 野末先生にお伺いします。ライティングセンターを立ち上げ、利用者数も伸びているとお話でしたが、本学においては、同じ時期からサポートスタッフを置いてもなかなか伸びない状況です。定着させるために、どういった工夫をされているか、教えていただければと思います。

(野末) 授業内で先生方に呼びかけてもらう方法もあると思います。本学では、昼休み 30 分でレポートのちょっとしたコツを教えるといった短時間のセミナーを頻繁にやっており、人数が集まり、相談も増えています。個別相談を受ける前の段階としてわかっていてほしいことをセミナーで伝達するという意味でも効果があると思います。テーマも変えているので、毎回来る学生もいます。チラシやポスターより、ある意味では、効果があるのではないかと思います。また、ツイッター等の SNS も一定の効果はあると思います。

(林) これで、本日のパネルディスカッションを終了させていただきます。ありがとうございます。

行 事

第 73 回 (2019 年度) 東海地区大学図書館協議会 総会・研究集会

日 時：令和元年 8 月 20 日(火) 10:00～17:00

会 場：静岡文化芸術大学 講堂

総会当番館：静岡文化芸術大学 図書館・情報センター

出 席 者：35 館 67 名

図 書 館 名		職 名
<input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> 岐阜県 <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>		
1	岐阜大学図書館	副館長・学術情報課長
2	岐阜保健大学図書館	司書
3	情報科学芸術大学院大学附属図書館	司書
<input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> 静岡県 <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>		
4	静岡大学附属図書館	学術情報部長
		図書館情報課長
		分館副課長
		係員
		パート職員
		パート職員
		パート職員
5	静岡県立大学附属図書館	事務長
6	静岡県立大学短期大学部附属図書館・静岡県立大学附属図書館小鹿図書館	事務長補佐
7	静岡理工科大学附属図書館	図書課長
8	東海大学付属図書館清水図書館	副主事
9	常葉大学附属図書館	瀬名図書課 主任
		水落図書課 主任
		浜松図書課 副主任
		草薙図書課 副主任
10	浜松医科大学附属図書館	学術情報課長
		学術情報課 情報サービス係員
<input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> 愛知県 <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>		
11	愛知医科大学総合学術情報センター	主任(司書)
12	愛知学院大学図書館情報センター	事務長補佐

図 書 館 名		職 名
13	愛知県立大学学術研究情報センター	図書情報課長
		学術情報課長
14	愛知県立芸術大学芸術情報センター図書館	図書情報係長
15	愛知工業大学附属図書館	図書館事務課 課長
		図書館事務課 係長
16	愛知東邦大学学術情報センター	学術情報課
17	桜花学園大学図書館 / 名古屋短期大学図書館	係長
18	椋山女学園大学図書館	図書館課員
19	中部大学附属三浦記念図書館	事務員
20	東海学園大学図書館	課長代理
21	豊橋技術科学大学附属図書館	教務課課長（情報・図書担当）
22	名古屋大学附属図書館	附属図書館長
		事務部長
		課長
		課長補佐
		図書系主任
		図書職員
23	名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館	課長
24	名古屋学院大学学術情報センター	課長
25	名古屋工業大学附属図書館	学術情報課長
26	名古屋女子大学学術情報センター	センター長補佐
27	名古屋市立大学総合情報センター	司書
28	日本赤十字看護大学学術情報センター・図書館	司書
29	日本福祉大学付属図書館	図書館長
		学務部次長兼図書館課長
		事務職員
		司書
30	人間環境大学附属図書館	司書
31	名城大学附属図書館	課長
		出向職員
<input type="checkbox"/> ■ 三重県 ■ <input type="checkbox"/>		
32	皇學館大学附属図書館	司書
33	三重大学附属図書館	情報・図書館課長
34	三重県立看護大学メ附属図書館	企画総務課 主事
		司書

図 書 館 名		職 名
<input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> 当番館 <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>		
35	静岡文化芸術大学図書館・情報センター	図書館・情報センター長
		情報室長兼情報係長
		図書係長
		主幹
		主事
		事務員
		臨時職員

総 会 議 事 要 録

(51 大学 84 名参加)

I 開会

II 挨拶

静岡文化芸術大学学長 横山 俊夫
東海地区大学図書館協議会長 森 仁志

III 議長選出

静岡文化芸術大学図書館・情報センター長
的場 ひろし

IV 報告事項

1 国公立の各大学図書館の活動状況、当面の課題等について

国公立の各協議会の理事校・幹事校（名古屋大学、愛知県立大学、日本福祉大学）から報告があった。

V 協議事項

1 会則の改正について

事務局から、東海地区大学図書館協議会会則の一部改正（案）について説明があり、提案のとおり承認された。

2 表彰者推薦に関する申合せの改正について

事務局から、表彰者推薦に関する申合せの一部改正（案）について説明があり、提案のとおり承認された。

3 退会館及び新規加盟館について

事務局から、退会館（東海大学短期大学部図書館）及び新規加盟館（岡崎女子大学・岡崎女子短期大学図書館）について説明があり、提案のとおり承認された。

4 2018 年度事業報告

事務局から、2018 年度事業報告の事業について、次のとおり報告があった。

(1) 第 72 回（2018 年度）総会

2018 年 8 月 24 日（金）
会場：愛知大学名古屋校舎
総会当番館：愛知大学図書館

1) 報告事項

国公立の各大学図書館の活動状況、当面の課題等について（名古屋大学、愛知県立大学、愛知大学）

2) 協議事項

平成 29 年度事業報告、平成 29 年度決算報告・同監査報告、平成 30 年度役員館について、平成 30 年度事業計画及び予算について、平成 31 年度図書館職員基礎研修分担金の徴収について、平成 31 年度総会当番館について、永年勤続者表彰（11 名）

(2) 研究集会

2018 年 8 月 24 日（金）

テーマ

「新たな知を創出する大学図書館の取り組み」
講演

「新たな学習交流拠点を目指して

－ 神田外語大学附属図書館の取り組み－」

吉野知義（神田外語大学附属図書館）

「司書課程と連動した学生協働の取り組み」

川崎安子（武庫川女子大学附属図書館）

(3) 「東海地区大学図書館協議会誌」第 63 号

2018 年 12 月 28 日（金）発行

(4) 研修会

2019 年 2 月 14 日（木）

会場：名古屋女子大学学術情報センター

研修担当館：名古屋女子大学学術情報センター
(27 大学・機関 44 名参加)

講義「利用者と図書館をつなぐ空間づくり」

ワークショップ 1 利用者の目線を考える

ワークショップ 2 空間のイメージをつかむ

尼川ゆら(空間演出コンサルタント)

(5) 運営委員会等

1) 研修企画小委員会（2018 年 8 月 24 日～
2019 年 6 月 19 日 電子メールによる審議
を含め 6 回開催）

- 2) 機関誌編集委員会 (2018年11月13日、2019年6月3日 電子メールによる審議)
- 3) 監事会 (2019年度、2019年6月5日(水)、会場：名古屋大学附属図書館
監事館：愛知県立芸術大学、名古屋学院大学)
- 4) 運営委員会 (2019年6月19日(水)、会場：名古屋大学附属図書館)

5 2018年度決算報告・同監査報告

事務局から、2018年度の決算について報告があった。続いて監事館を代表して愛知県立芸術大学から、監査の結果、経理は適正に処理されていることを確認したとの報告があった。

2018年度の決算報告について、報告のとおり承認された。

- ## 6 2019年度事業計画(案)及び予算(案)について
- 事務局から、2019年度事業計画(案)及び予算(案)について説明があり、案のとおり承認された。

- ## 7 2020年度総会当番館、研修会会場館について
- 第74回(2020年度)総会・研究集会の当番館として日本福祉大学、研修会会場館として三重県立看護大学が選出され、次期総会当番館の日本福祉大学附属図書館 亀谷和史館長から、挨拶があった。

VI 永年勤続者表彰

2019年度永年勤続者として、7名が表彰された。

永年勤続表彰者：

- | | |
|--------|----------|
| 神谷 一恵 | (静岡大学) |
| 成田 美弥子 | (愛知大学) |
| 市川 美智子 | (愛知医科大学) |
| 山村 史子 | (愛知淑徳大学) |
| 九鬼 由紀 | (愛知淑徳大学) |
| 峯野 幸子 | (東海学園大学) |
| 峯岸 ななえ | (名古屋大学) |

VII 閉会

【研究集会の部】

日時：2019年8月20日(火)
13:30～16:30

会場：静岡文化芸術大学 講堂
テーマ：「大学図書館の学修支援」

◇講演：

「大学における学修支援と図書館の役割」

青山学院大学教育人間科学部教育学科教授、
青山学院大学図書館長・アカデミックライ
ティングセンター長 野末 俊比古



◇事例報告：

- ①「青山学院大学アカデミックライティングセンターの活動について」

青山学院大学教育人間科学部教育学科教授、
青山学院大学図書館長・アカデミックライ
ティングセンター長 野末 俊比古

- ②「学生協働による学修支援活動－静岡理工科大学附属図書館の取り組み－」

静岡理工科大学図書館課長 岡部 恵理



- ③「図書館における科学教育の試み」
静岡文化芸術大学図書館・情報センター長
的場 ひろし



- ◇パネルディスカッション
パネリスト：事例報告3氏
モデレーター：静岡文化芸術大学文化政策学部
文化政策学科教授 林 左和子



2018 年度決算報告

(2018 年 4 月 1 日～2019 年 3 月 31 日)

科 目	予算額 a	決算額 b	過△不足額 b - a	備 考
収入の部	円	円	円	
1. 前年度繰越金	2,460,662	2,460,662	0	
2. 会 費	705,500	705,500	0	2018 年度分：@8,500 × 83 館 = 705,500
3. 会誌売上	72,500	72,500	0	63 号分：@2,500 × 29 部 = 72,500
4. 分 担 金	-	-	-	北陸 4 国立大学からの基礎研修分担金
5. 雑 収 入	400,000	335,000	△ 65,000	協議会誌広告掲載料 (63 号) 335,000 @30,000 × 1 社 = 30,000 @25,000 × 1 社 = 25,000 @20,000 × 9 社 = 180,000 @10,000 × 10 社 = 100,000
6. 預 金 利 息	19	21	2	
計	3,638,681	3,573,683	△ 64,998	

* 前年度繰越金を除く 2018 年度の収入額 1,113,021 円

科 目	予算額 c	決算額 d	過△不足額 c - d	備 考
支出の部	円	円	円	
1. 総会補助金	100,000	100,000	0	第 72 回総会 (愛知大学)
2. 研究集会費	100,000	130,348	△ 30,348	講師 (2 名) (加盟館外) 謝金等
3. 研 修 会 費	250,000	53,898	196,102	当番館経費 (名古屋女子大学), 講師謝金等
4. 会誌刊行費	480,000	481,680	△ 1,680	63 号 200 部
5. 役員会経費	5,000	4,784	216	運営委員会, 監事会
6. 事 務 費	120,000	30,809	89,191	ポータブルハードディスク等の事務用品
7. 通 信 費	70,000	59,744	10,256	会誌送付等郵便料金
8. 表彰記念費	30,000	86,649	△ 56,649	永年勤続表彰者 11 名の記念品 (ネーム印付きボールペン), 旅費 (事務局を除く) 等
9. 予 備 費	2,483,681	0	2,483,681	
10. 次年度繰越金	0	2,625,771	△ 2,625,771	
計	3,638,681	3,573,683	64,998	

* 次年度繰越金を除く 2018 年度の支出額 947,912 円

2019 年 3 月 31 日締め
 預金残高 2,625,771 円
 現金残高 0 円
 資産総額 2,625,771 円

会計監査 2019 年 6 月 5 日

愛知県立芸術大学
名古屋学院大学

監査済み

2019 年度予算

(2019 年 4 月 1 日～2020 年 3 月 31 日)

科 目	前年度 決算額 a	本年度 予算額 b	前年度決算額 よりの増△減 b - a	備 考
収入の部	円	円	円	
1. 前年度繰越金	2,460,662	2,625,771	165,109	
2. 会 費	705,500	714,000	8,500	2019 年度分：@8,500 × 84 館 = 714,000
3. 会誌売上費	72,500	57,500	△ 15,000	64 号分：@2,500 × 23 部 = 57,500
4. 分 担 金	0	6,400	6,400	基礎研修開催年度に限り北陸地区国立大 学から徴収する
5. 雑 収 入	335,000	335,000	0	協議会誌広告掲載料 64 号分
6. 預 金 利 息	21	21	0	
計	3,573,683	3,738,692	165,009	

* 前年度繰越金を除く本年度の収入見込み額 1,112,921 円

科 目	前年度 決算額 c	本年度 予算額 d	前年度決算額 よりの増△減 d - c	備 考
支出の部	円	円	円	
1. 総会補助金	100,000	100,000	0	第 73 回総会（静岡文化芸術大学）
2. 研究集会費	130,348	100,000	△ 30,348	講師謝金等
3. 研 修 会 費	53,898	150,000	96,102	当番館経費（名古屋大学）、講師謝金等
4. 会誌刊行費	481,680	480,000	△ 1,680	64 号 180 部
5. 役員会経費	4,784	5,000	216	運営委員会、監事会
6. 事 務 費	30,809	100,000	69,191	
7. 通 信 費	59,744	70,000	10,256	会誌送付等郵便料金
8. 表 彰 記 念 費	86,649	100,000	13,351	永年勤続表彰者 7 名の記念品（ネーム印 付ボールペン）、旅費等
9. 予 備 費	0	2,633,692	2,633,692	
10. 次年度繰越金	2,625,771	0	△ 2,625,771	
計	3,573,683	3,738,692	165,009	

* 予備費を除く本年度の支出見込み額 1,105,000 円

会 則 等

東海地区大学図書館協議会会則

(名 称)

第1条 本会は、東海地区大学図書館協議会と称する。

(目 的)

第2条 本会は、東海地区大学図書館の発展を図ると共に、図書館員の教養と技術の向上及び相互の親睦をはかることを目的とする。

(会 員)

第3条 本会は、前条の目的に賛同する東海地区（静岡、愛知、岐阜、三重）の国立、公立、私立の大学図書館その他これに準ずる図書館を以て組織する。

(事 業)

第4条 本会は、第2条の目的を達するために、次の事業を行う。

- 一 会員相互間の連絡提携
- 二 図書及び図書館に関する研究会、講習会、
展覧会等の開催並びに後援
- 三 図書館運営に関する相談、指導
- 四 機関誌の発行
- 五 その他必要と認める事業

(会 長)

第5条 本会に会長を置く。

2. 総会において会長館を選出し、その会長館の
図書館長が会長となる。
3. 会長の任期は、2年とする。但し、重任を妨
げない。

(委員会)

第6条 本会に運営委員会及び機関誌編集委員会
を置く。

2. 委員会に関する事項は、別に定める。

(総 会)

第7条 会長は、毎年一回総会を招集する。

2. 会場は、加盟館の輪番とする。

第8条 会長館は、協議事項（議題及び承合事項）
をとりまとめ、審議運行の手続きを計る。

第9条 総会の票決権は、一館一票とし議決は出
席館の過半数の賛成を要する。

(会 計)

第10条 本会の経費は、会費その他の収入をもっ
てあてる。

2. 会員の会費は、年額8,500円とする。

第11条 本会の会計事務を監査するため、監事
を置く。

2. 総会において監事館を選出し、その監事館の
図書館長が監事となる。
3. 監事の任期は2年とする。但し、重任を妨げ
ない。

第12条 本会の予算は、毎年総会の議決を経て
決定し、決算は監査を受けたのち、次の総会に
おいて承認を得るものとする。

第13条 本会の会計年度は、4月1日に始まり、
翌年3月31日に終る。

(事務局)

第14条 会長館に、本会の事務局を置く。

2. 事務局に、事務局長及び職員を置く。
3. 会長館の事務部長、又はこれに準ずる者が事
務局長となる。

(加盟と脱退)

第15条 本会に加盟を希望するものは、会長に

申請し、総会の承認を得なければならない。

2. 本会からの脱退を希望するものは、理由を付して会長に申請しなければならない。脱退については総会に報告する。

(会則の変更)

第16条 この会則の変更は、総会の承認を得なければならない。

(附 則)

本会則は、昭和25年5月1日から施行する。

(附 則)

この改正は、昭和50年7月23日より施行する。

(附 則)

この改正は、平成27年8月21日より施行する。

(附 則)

この改正は、令和元年8月20日より施行する。

東海地区大学図書館協議会

運営委員会規程

第1条 運営委員会は、本会の運営に関する事項を審議する。

第2条 運営委員会の構成は、国立大3、公立大3、私立大4、(短大1を含む)とする。

第3条 運営委員は、総会において選出する。

2 運営委員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

3 前項の任期が満了しても、後任者が就任するまでは、なお、その任にあるものとする。

第4条 運営委員会に、委員長をおく。

2 運営委員長は、会長がこれに当たる。

3 運営委員長は、必要に応じ委員会を招集することができる。

第5条 運営委員会に、必要に応じて小委員会を置くことができる。

第6条 運営委員会の事務は、事務局内において行う。

附 則

この改正は平成12年7月19日から施行する。

東海地区大学図書館協議会

機関誌編集委員会規程

1 機関誌の発行について、編集委員会を設ける。

2 編集委員は、会長の指名による。

3 編集委員会に、委員長を置く。

4 編集委員長は、会長がこれにあたる。

5 編集委員長は、必要に応じ委員会を招集することができる。

6 編集委員会の事務は、事務局内において行う。

東海地区大学図書館協議会

研修企画小委員会内規

平成12年10月6日

運営委員会

(目的)

第1 この内規は、東海地区大学図書館協議会(以下「協議会」という。)の研修に関し、必要な

事項を審議するため、運営委員会の下に研修企画小委員会(以下「小委員会」という。)を置き、必要な事項を定めることを目的とする。

(審議事項)

第2 小委員会は、次に掲げる事項を行う。

一 協議会が行う研修の企画に関すること

二 その他研修に関し、必要な事項

(小委員会の構成)

第3 小委員会は、次に掲げる委員館をもって構成する。

一 協議会会長館

二 国立、公立、私立の運営委員館から各1館

三 研修会会場館

2 小委員会に委員長館を置き、小委員会の互選による。

(小委員会の庶務)

第4 小委員会の庶務は、協議会事務局において処理する。

附 則

この内規は、平成12年10月6日から施行する。

東海地区大学図書館協議会

ホームページ小委員会内規

平成12年10月6日

運営委員会

(目的)

第1 この内規は、東海地区大学図書館協議会(以下「協議会」という。)のホームページ(以下「ホームページ」という。)に関し、必要な事項を審議するため、運営委員会の下にホームページ小委員会(以下「小委員会」という。)を置き、必要な事項を定めることを目的とする。

(審議事項等)

第2 小委員会は、次に掲げる事項を行う。

一 ホームページの運用・管理に関すること。

二 ホームページの企画・編集に関すること。

三 その他ホームページに関し、必要な事項。

(小委員会の構成)

第3 小委員会は次に掲げる委員館をもって構成する。

- 一 協議会会長館
 - 二 国立、公立、私立の運営委員館から各1館
- 2 小委員会に委員長館を置き、小委員会の互選による。
(小委員会の庶務)

第4 小委員会の庶務は、協議会事務局において処理する。

附 則

この内規は、平成12年10月6日から施行する。

東海地区大学図書館協議会ホームページ による情報発信に関わる申し合わせ

平成12年10月6日
運営委員会

1 情報発信の範囲

ホームページを通じて発信する情報は、次の各号に該当するものとする。

- ①協議会事業に関する情報
- ②協議会加盟館に関する情報
- ③その他ホームページ小委員会（以下「小委員会」という。）が必要と認めた情報

2 情報発信できる者の範囲

ホームページを通じて情報発信できる者は協議会加盟館とする。

3 情報発信の手続き

- ①ホームページを通じて情報発信しようとする者は、協議会事務局宛にHTML形式の文書をメールで送付するものとする。
- ②加盟館から送付された文書の内容は原則として変更しない。
- ③ホームページに掲載する文書の登録及び削除の決定は、小委員会が行う。但し、疑義があるときは、小委員会は運営委員会委員長と協議する。
- ④ホームページを通じて情報公開している者で、公開する情報の変更又は停止等の事由が生じた時は、速やかに協議会事務局に連絡する。
- ⑤小委員会は公開されたホームページの情報が不適当と判断した場合は、そのファイルを削

除し、リンクを切断することができるものとする。

4 ホームページ

当分の間、ホームページは名古屋大学附属図書館内のサーバーに置く。

表彰規程

第1条 東海地区大学図書館協議会会則第4条第5号に基づき加盟館の職員に対して行う表彰はこの規程の定めるところによる。

第2条 毎年総会の前日までに通算20年図書館に在職する者。

第3条 この規程による表彰は加盟館長の推薦により総会において行う。

第4条 表彰者には記念品及び感謝状を贈呈する。

第5条 この規程の改正は総会の議決によって行う。

附 則

この規程は、昭和44年10月29日から実施する。

表彰者推薦に関する申合せ

(昭和53年9月4日)

(改正 令和元年8月20日)

東海地区大学図書館協議会の加盟館に在職する者のうち、つぎの各項のいずれかに該当する者を推薦することとする。

- (1) 毎年総会の前日までに通算20年以上加盟館に在職する者。
- (2) 毎年総会の前日までに通算25年以上図書館に在職し、かつ3年以上加盟館に在職する者。
なお、(1)、(2)のいずれについても事務補佐員等としての在職期間も加算するものとする。

「図書館職員基礎研修」実施に関する 分担金についての申合せ

(平成27年8月21日)

「図書館職員基礎研修」(以下、「基礎研修」と

いう。)については、平成 25 年度東海地区大学図書館協議会総会において、東海北陸地区国立大学図書館協会と共催することを決定した。これに伴う分担金の取り扱いについて以下のとおり定める。

1. 東海北陸地区国立大学図書館協会加盟館のうち、北陸地区に所在する 4 大学（以下、「北陸地区 4 国立大学」という。）から、基礎研修実施年度に限り、分担金を徴収することとする。
2. 分担金の金額は、前回の基礎研修開催に要した経費を、東海地区大学図書館協議会加盟館及び北陸地区 4 国立大学の合計数で除した値を基礎にして、その都度東海地区大学図書館協議会運営委員会で定める。

総会当番館一覧

東海地区大学図書館協議会 総会当番館一覧

回	年月	館名	県別	回	年月	館名	県別
1	昭 25. 6	名古屋大学	愛知	39	60.10	豊橋技術科学大学	愛知
2	26. 6	金城学院大学	〃	40	61. 6	中京大学	〃
3	26.11	三重大学	三重	41	62. 6	愛知県立大学	〃
4	27. 5	愛知学芸大学	愛知	42	63. 6	愛知学院大学	〃
5	27.10	名古屋工業大学	〃	43	平成元 . 6	愛知教育大学	〃
6	28. 5	三重県立大学	三重	44	2. 6	愛知大学	〃
7	28. 8	名古屋市立大学	愛知	45	3. 7	静岡県立大学	静岡
8	29.10	静岡大学	静岡	46	4. 6	中部大学	愛知
9	30. 9	岐阜大学	岐阜	47	5. 6	岐阜大学	岐阜
10	31. 5	愛知大学	愛知	48	6. 7	名古屋学院大学	愛知
11	32.10	日本大学 (三島)	静岡	49	7. 6	岐阜薬科大学	岐阜
12	33. 6	名城大学	愛知	50	8. 7	愛知大学	愛知
13	34. 9	岐阜薬科大学	岐阜	51	9. 7	浜松医科大学	静岡
14	35.11	名古屋大学	愛知	52	10. 7	日本福祉大学	愛知
15	36.11	南山大学	〃	53	11. 7	愛知県立看護大学	〃
16	37. 6	岐阜県立医科大学	岐阜	54	12. 7	愛知工業大学	〃
17	38. 6	名古屋工業大学	愛知	55	13. 7	三重大学	三重
18	39.10	愛知県立大学	〃	56	14. 7	金城学院大学	愛知
19	40.10	日本福祉大学	〃	57	15. 6	岐阜県立看護大学	岐阜
20	41.10	中京大学	〃	58	16. 7	南山大学	愛知
21	42.11	岐阜薬科大学	岐阜	59	17. 7	名古屋工業大学	〃
22	43.11	愛知学院大学	愛知	60	18. 7	名城大学	〃
23	44.10	三重大学	三重	61	19. 8	愛知県立芸術大学	〃
24	45. 9	同朋大学	愛知	62	20. 8	愛知淑徳大学	〃
25	46.10	名古屋市立大学	〃	63	21. 8	名古屋大学	〃
26	47.10	中部工業大学	〃	64	22. 8	名古屋外国語大学・ 名古屋学芸大学	〃
27	48.10	愛知教育大学	〃	65	23. 8	名古屋市立大学	〃
28	49.10	大同工業大学	〃	66	24. 8	中京大学	〃
29	50. 7	愛知県立芸術大学	〃	67	25. 8	静岡大学	静岡
30	51. 6	市邨学園女子短期大学	〃	68	26. 8	中部大学	愛知
31	52. 6	静岡大学	静岡	69	27. 8	愛知県立大学	〃
32	53. 9	愛知工業大学	愛知	70	28. 8	名古屋学院大学	〃
33	54. 9	静岡女子大学	静岡	71	29. 8	豊橋技術科学大学	〃
34	55. 9	名古屋学院大学	愛知	72	30. 8	愛知大学	〃
35	56.10	浜松医科大学	静岡	73	令和元 . 8	静岡文化芸術大学	静岡
36	57. 9	名古屋女子大学	愛知	74	2. 8	日本福祉大学 (予定)	愛知
37	58.10	静岡薬科大学	静岡	75	3. 8	愛知教育大学 (予定)	〃
38	59. 9	南山大学	愛知	76	4. 8	愛知工業大学 (予定)	〃

国立→私立→公立→私立の順による

加盟館一覧

東海地区大学図書館協議会加盟館一覧

令和元年 12 月 1 日現在

図書館名	法人名	館長	郵便番号	住所	電話	FAX
(84)						
<input type="checkbox"/> ■ 岐阜県 ■ <input type="checkbox"/> (14)						
朝日大学図書館	学校法人 朝日大学	平田 勇人	〒 501-0296	瑞穂市穂積 1851-1	(058)329-1051	(058)329-0021
岐阜大学図書館	国立大学法人	野々村修一	〒 501-1193	岐阜市柳戸 1-1	(058)293-2184	(058)293-2194
岐阜医療科学大学 図書館	学校法人 神野学園	成 順月	〒 501-3892	関市市平賀字長峰 795-1	(0575)22-9401	(0575)46-9570
岐阜協立大学図書館	学校法人 大垣総合学園	高橋 利行	〒 503-8550	大垣市北方町 5-50	(0584)77-3527	(0584)77-3528
岐阜県立看護大学 図書館	公立大学法人 岐阜県立看護大学	服部 律子	〒 501-6295	羽島市江吉良町 3047-1	(058)397-2304	(058)397-2304
岐阜市立女子短期大学 附属図書館		服部 宏己	〒 501-0192	岐阜市一日市場北町 7-1	(058)296-3123	(058)296-3130
岐阜聖徳学園大学 図書館	学校法人 聖徳学園	大塚 容子	〒 501-6194	岐阜市柳津町高桑西 1-1	(058)279-6416	(058)279-1242
岐阜女子大学図書館	学校法人 華陽学園	木俣 正剛	〒 501-2592	岐阜市太郎丸 80	(058)214-9317	(058)229-2222
岐阜保健大学図書館	学校法人 豊田学園	内藤 直子	〒 500-8281	岐阜市東鶉 2-92	(058)274-5001	(058)274-5260
岐阜薬科大学 附属図書館		伊藤 彰近	〒 502-8585	岐阜市三田洞東 5 丁目 6-1	(058)237-3931	(058)237-3631
情報科学芸術大学院 大学附属図書館		前田真二郎	〒 503-0006	大垣市加賀野 4-1-7	(0584)75-6803	(0584)75-6803
中京学院大学 図書メディアセンター	学校法人 安達学園	眞部 孝幸	〒 509-6192	瑞浪市土岐町 2216	(0572)68-4584	(0572)68-4568
中部学院大学 附属図書館	学校法人 岐阜済美学院	鈴木 壯	〒 501-3993	関市桐ヶ丘二丁目 1 番地	(0575)24-2243	(0575)24-2434
東海学院大学・ 東海学院大学短期大学 部附属図書館	学校法人 神谷学園	アンドリュース・デューア	〒 504-8511	各務原市那加桐野町 5-68	(058)389-2969	(058)371-9851
<input type="checkbox"/> ■ 静岡県 ■ <input type="checkbox"/> (12)						
静岡大学附属図書館	国立大学法人	澤田 均	〒 422-8529	静岡市駿河区大谷 836	(054)238-4474	(054)238-5408
静岡県立大学 附属図書館	静岡県 公立大学法人	小幡 壯	〒 422-8526	静岡市駿河区谷田 52-1	(054)264-5801	(054)264-5899
静岡県立大学短期大学部 附属図書館・静岡県立大 学附属図書館小鹿図書館	静岡県 公立大学法人	小林佐知子 小幡 壯	〒 422-8021	静岡市駿河区小鹿 2-2-1	(054)202-2617	(054)202-2620
静岡産業大学図書館	学校法人 新静岡学園	浅羽 浩	〒 438-0043	磐田市大原 1572-1	(0538)36-8844	(0538)36-3580
静岡文化芸術大学 図書館・情報センター	公立大学法人 静岡文化芸術大学	の場ひろし	〒 430-8533	浜松市中区中央二丁目 1 番 1 号	(053)457-6124	(053)457-6125
静岡理工科大学 附属図書館	学校法人 静岡理工科大学	小林久理真	〒 437-8555	袋井市豊沢 2200-2	(0538)45-0231	(0538)45-0230
聖隷クリストファー 大学図書館	学校法人 聖隷学園	渡辺 泰宏	〒 433-8558	浜松市北区三方原町 3453	(053)439-1416	(053)414-1146
東海大学 附属図書館清水図書館	学校法人 東海大学	川崎 一平	〒 424-8610	静岡市清水区折戸 3-20-1	(054)334-0414	(054)334-0862

図書館名	法人名	館長	郵便番号	住所	電話	FAX
東海大学 短期大学部図書館	学校法人 東海大学	中上 健二	〒420-8511	静岡市葵区宮前町101	(054)261-9527	(054)261-6865
常葉大学附属図書館	学校法人 常葉大学	大川 信子	〒422-8581	静岡市駿河区弥生町6-1	(054)297-6136	(054)297-6137
日本大学図書館 国際関係学部分館	学校法人 日本大学	濱屋 雅軌	〒411-8555	三島市文教町2丁目31-145	(055)980-0806	(055)988-7875
浜松医科大学 附属図書館	国立大学法人	浦野 哲盟	〒431-3192	浜松市東区半田山一丁目20-1	(053)435-2169	(053)435-5140

■ 愛知県 ■ (51)

愛知大学図書館	学校法人 愛知大学	塩山 正純	〒453-8777	名古屋市中村区平池町 4丁目60番6	(052)564-6115	(052)564-6215
愛知医科大学 総合学術情報センター	学校法人 愛知医科大学	中野 隆	〒480-1195	長久手市岩作雁又1-1	(0561)62-3311 (代表)	(0561)62-3348
愛知学院大学 図書館情報センター	学校法人 愛知学院	二宮 克美	〒470-0195	日進市岩崎町阿良池12	(0561)73-1111 (代表)	(0561)73-7810
愛知学泉大学図書館	学校法人 安城学園	浦田 葉子	〒444-8520	岡崎市舩越町上川成28	(0564)34-1209	(0564)34-1270
愛知教育大学 附属図書館	国立大学法人	菅沼 教生	〒448-8542	刈谷市井ヶ谷町広沢1	(0566)26-2683	(0566)26-2680
愛知県立大学学術研究 情報センター図書館	愛知県 公立大学法人	梶原 克教	〒480-1198	長久手市茨ヶ廻間1522-3	(0561)76-8841	(0561)64-1104
愛知県立芸術大学 芸術情報センター図書館	愛知県 公立大学法人	三宮 敦生	〒480-1194	長久手市岩作三ヶ峯1-114	(0561)76-2963	(0561)62-0244
愛知工科大学 附属図書館	学校法人 電波学園	森 勝行	〒443-0047	蒲郡市西迫町馬乗50-2	(0533)68-1135	(0533)68-0352
愛知工業大学 附属図書館	学校法人 名古屋電気学園	村瀬 洋	〒470-0392	豊田市八草町八千草1247	(0565)48-8121	(0565)48-2908
愛知産業大学・ 短期大学図書館	学校法人 愛知産業大学	伊藤万知子	〒444-0005	岡崎市岡町字原山12-5	(0564)48-4591	(0564)48-5113
愛知淑徳大学図書館	学校法人 愛知淑徳学園	平林美都子	〒480-1197	長久手市片平2-9	(0561)62-4111 (代表)	(0561)64-0310
愛知東邦大学 学術情報センター	学校法人 東邦学園	高木 靖彦	〒465-8515	名古屋市名東区平和が丘3-11	(052)782-1243	(052)782-1097
愛知文教大学 附属図書館	学校法人 足立学園	富田 健弘	〒485-8565	小牧市大草5969-3	(0568)78-2211	(0568)78-2240
桜花学園大学図書館	学校法人 桜花学園	斎 孝則	〒470-1193	豊明市栄町武侍48	(0562)97-1725	(0562)97-1703
岡崎女子大学・ 岡崎女子短期大学図書館	学校法人 清光学園	赤羽根有里子	〒444-0015	岡崎市中町1-8-4	(0564)28-3318	(0564)28-3323
金城学院大学図書館	学校法人 金城学院	大橋 陽	〒463-8521	名古屋市守山区大森2-1723	(052)798-0180	(052)768-1066
至学館大学附属図書館	学校法人 至学館	岡川 暁	〒474-8651	大府市横根町名高山55	(0562)46-1239	(0562)46-3860
自然科学研究機構 岡崎情報図書館	大学共同利用 機関法人	川合 真紀	〒444-8585	岡崎市明大寺町西郷中38	(0564)55-7191	(0564)55-7199
修文大学附属図書館	学校法人 修文学院	越川 卓	〒491-0938	一宮市日光町6番地	(0586)45-2101	(0586)45-4410
椙山女学園大学図書館	学校法人 椙山女学園	長谷川淳基	〒464-8662	名古屋市千種区星が丘元町17-3	(052)781-6452	(052)781-3094
星城大学図書館	学校法人 名古屋石田学園	坂井 一也	〒476-8588	東海市富貴ノ台2-172	(052)601-6000 (代表)	(052)601-6137
瀬木学園図書館	学校法人 瀬木学園	田中 良三	〒467-0867	名古屋市瑞穂区春敲町2-13	(052)882-3152	(052)882-3170
大同大学図書館	学校法人 大同学園	杉本 幸雄	〒457-8530	名古屋市南区滝春町10-3	(052)612-6873	(052)612-6108

図書館名	法人名	館長	郵便番号	住所	電話	FAX
中京大学図書館	学校法人 梅村学園	佐藤 隆	〒466-8666	名古屋市昭和区八事本町 101-2	(052)835-7157	(052)835-1249
中部大学 附属三浦記念図書館	学校法人 中部大学	岡崎 明彦	〒487-8501	春日井市松本町 1200	(0568)51-4317	(0568)52-1510
同朋大学・ 名古屋音楽大学図書館	学校法人 同朋学園	大岡 訓子	〒453-8540	名古屋市中村区稲葉地町 7-1	(052)411-1951	(052)411-1120
東海学園大学図書館	学校法人 東海学園	青山 広	〒468-8514	名古屋市天白区中平 2 丁目 901	(052)801-1528	(052)804-1192
豊田工業大学 総合情報センター	学校法人 トヨタ学園	大石 泰丈	〒468-8511	名古屋市天白区久方 2-12-1	(052)809-1743	(052)809-1744
豊田工業高等専門学校 図書館	独立行政法人国立 高等専門学校機構	神谷 昌明	〒471-8525	豊田市栄生町 2-1	(0565)36-5904	(0565)36-5920
豊橋技術科学大学 附属図書館	国立大学法人	大貝 彰	〒441-8580	豊橋市天伯町雲雀ヶ丘 1-1	(0532)44-6562	(0532)44-6566
豊橋創造大学 附属図書館	学校法人 藤ノ花学園	佐藤 勝尚	〒440-8511	豊橋市牛川町松下 20-1	(050)2017-2105	(050)2017-2115
名古屋大学附属図書館	国立大学法人	森 仁志	〒464-8601	名古屋市千種区不老町	(052)789-3666	(052)789-3693
名古屋外国語大学・ 名古屋学芸大学図書館	学校法人 中西学園	浅野 妙子	〒470-0188	日進市岩崎町竹ノ山 57	(0561)75-1726	(0561)75-1727
名古屋学院大学 学術情報センター	学校法人 名古屋学院大学	伊藤 昭浩	〒456-8612	名古屋市熱田区熱田西町 1-25	(052)678-4092	(052)682-6826
名古屋経済大学図書館	学校法人 市邨学園	富岡 仁	〒484-0000	犬山市字樋池 61-22	(0568)67-3798	(0568)67-9321
名古屋芸術大学 附属図書館	学校法人 名古屋自由学院	片岡 祐司	〒481-8503	北名古屋市熊之庄古井 281	(0568)26-3121	(0568)24-0393
名古屋工業大学図書館	国立大学法人	内匠 逸	〒466-8555	名古屋市昭和区御器所町	(052)735-5098	(052)735-5102
名古屋産業大学・ 名古屋経営短期大学図書館	学校法人 菊武学園	菅井 径世	〒488-8711	尾張旭市新居町山の田 3255-5	(0561)55-3081	(0561)55-5985
名古屋商科大学 中央情報センター	学校法人 栗本学園	浅野 一明	〒470-0193	日進市米野木町三ヶ峯 4-4	(0561)73-2111 (代表)	(0561)73-1202
名古屋女子大学 学術情報センター	学校法人 越原学園	越原洋二郎	〒467-8610	名古屋市瑞穂区汐路町 3-40	(052)852-9768	(052)852-1830
名古屋市立大学 総合情報センター	公立大学法人 名古屋市立大学	三澤 哲也	〒467-8501	名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑 1	(052)872-5795	(052)872-5781
名古屋造形大学図書館	学校法人 同朋学園	大岡 訓子	〒485-8563	小牧市大字大草字年上坂 6004	(0568)79-1255	(0568)47-0361
名古屋短期大学図書館	学校法人 桜花学園	茶谷 淳一	〒470-1193	豊明市栄町武待 48	(0562)97-1725	(0562)97-1703
名古屋文理大学 図書情報センター	学校法人 滝川学園	山住 富也	〒492-8520	稲沢市稲沢町前田 365	(0587)23-2400 (代表)	(0587)21-2844
名古屋柳城短期大学 図書館	学校法人 柳城学院	村田 康常	〒466-0034	名古屋市昭和区明月町 2-54	(052)841-2635	(052)841-2697
南山大学図書館	学校法人 南山学園	山田 望	〒466-8673	名古屋市昭和区山里町 18	(052)832-3163	(052)832-3462
日本赤十字豊田看護大学 学術情報センター・図書館	学校法人 日本赤十字学園	下間 正隆	〒471-8565	豊田市白山町七曲 12-33	(0565)36-5119	(0565)37-7897
日本福祉大学 付属図書館	学校法人 日本福祉大学	亀谷 和史	〒470-3295	知多郡美浜町大字奥田字会下前 35 番 6	(0569)87-2325	(0569)87-2795
人間環境大学 附属図書館	学校法人 河原学園	岡 良和	〒444-3505	岡崎市本宿町字上三本松 6-2	(0564)48-7815	(0564)48-7815
藤田医科大学図書館	学校法人 藤田学園	橋本 修二	〒470-1192	豊明市沓掛町田楽ヶ窪 1-98	(0562)93-2420	(0562)93-2649
名城大学附属図書館	学校法人 名城大学	前田 智彦	〒468-8502	名古屋市天白区塩釜口 1-501	(052)832-1151 (代表)	(052)833-6046

図書館名	法人名	館長	郵便番号	住所	電話	FAX
□■ 三重県 ■□	(7)					
皇學館大学附属図書館	学校法人 皇學館	吉田 直樹	〒 516-8555	伊勢市神田久志本町 1704	(0596) 22-6322	(0596) 22-6329
鈴鹿医療科学大学 附属図書館	学校法人 鈴鹿医療科学大学	藤原 芳朗	〒 510-0293	鈴鹿市岸岡町 1001-1	(059) 340-0337	(059) 383-9915
鈴鹿大学附属図書館	学校法人 享栄学園	木之内秀彦	〒 510-0298	鈴鹿市郡山町 663-222	(059) 372-3950	(059) 372-2827
鈴鹿大学短期大学部 附属図書館	学校法人 享栄学園	木之内秀彦	〒 510-0298	鈴鹿市郡山町 663-222	(059) 372-3950	(059) 372-3903
三重大学附属図書館	国立大学法人	梅川 逸人	〒 514-8507	津市栗真町屋町 1577	(059) 231-9083	(059) 231-9086
三重県立看護大学メディアコミュ ニケーションセンター附属図書館	公立大学法人 三重県立看護大学	浦野 茂	〒 514-0116	津市夢が丘 1-1-1	(059) 233-5608	(059) 233-5668
津市立三重短期大学 附属図書館		楠本 孝	〒 514-0112	津市一身田中野 157	(059) 232-2341	(059) 232-9647

役員館一覧

東海地区大学図書館協議会役員館一覧（平成16年度～平成31年度）

年度	総会 当番館	研修会 会場館	会長館	運営委員会	機関誌編集 委員会	監事会	研修企画 小委員会	ホームページ 小委員会
				会長 国立3、公立3、私立4（短大1を含む） オブザーバ：総会当番館	会長 編集委員は会長 の指名	総会で選出、監事 館の図書館長が監 事となる	会長館 国立、公立、私 立の運営委員館 から各1館 研修会会場館	会長館 国立、公立、私 立の運営委員館 から各1館
平成 16 年度	南山大学	名古屋 大学 岐阜大学	名古屋 大学	浜松医科大学 三重大学 名古屋工業大学 愛知県立看護大学 名古屋市立大学 ／静岡県立大学短期大学部（H17）	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知学院大学	愛知県立芸術大学 金城学院大学	名古屋大学 名古屋工業大学 名古屋市立大学 中京大学 研修会会場館	
平成 17 年度	名古屋 工業大学	中京大学 名古屋 大学		南山大学 中京大学 東海女子大学 名古屋経済大学短期大学部				
平成 18 年度	名城大学	岐阜県立 看護大学 名古屋 大学	名古屋 大学	静岡大学 豊橋技術科学大学 愛知教育大学 愛知県立看護大学 名古屋市立大学 静岡県立大学短期大学部（H18）	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知学院大学	愛知県立芸術大学 南山大学	名古屋大学 静岡大学 名古屋市立大学 中部大学 研修会会場館	名古屋大学 豊橋技術科学大学 名古屋市立大学 中京女子大学
平成 19 年度	愛知県立 芸術大学	名古屋 大学 中部大学		／三重短期大学（H19） 名城大学 中部大学 中京女子大学 名古屋柳城短期大学				
平成 20 年度	愛知淑徳 大学	浜松医科 大学 名古屋 大学	名古屋 大学	岐阜大学 浜松医科大学 三重大学 愛知県立看護大学（H20）／愛知県立大学（H21）	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知学院大学	愛知県立芸術大学 名城大学	名古屋大学 浜松医科大学 名古屋市立大学 同朋学園大学	名古屋大学 三重大学 名古屋市立大学 豊田工業大学
平成 21 年度	名古屋 大学	同朋学園 大学 名古屋 大学		名古屋市立大学 津市立三重短期大学 愛知淑徳大学 同朋学園大学 豊田工業大学 鈴鹿短期大学				
平成 22 年度	名古屋外 国語大学 ・名古屋 学芸大学	静岡県立 大学 名古屋 大学	名古屋 大学	名古屋工業大学 静岡大学 豊橋技術科学大学 愛知学院大学 名古屋市立大学 岐阜市立女子短期大学 名古屋外国語大学・名古屋学芸大学 豊橋創造大学 名古屋学院大学 名古屋産業大学・名古屋経営短期大学図書館	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知学院大学	愛知県立芸術大学 愛知淑徳大学	名古屋大学 静岡大学 名古屋市立大学 豊橋創造大学 静岡県立大学	名古屋大学 豊橋技術科学大学 名古屋市立大学 名古屋学院大学
平成 23 年度	名古屋 市立大学	豊橋創造 大学 名古屋 大学						
平成 24 年度	中京大学	三重大学 名古屋 大学	名古屋 大学	愛知教育大学 岐阜大学 浜松医科大学 愛知学院大学 名古屋市立大学 静岡県立短期大学部 中京大学 名古屋経済大学 名古屋芸術大学 名古屋柳城短期大学	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 名古屋市立大学 愛知学院大学	愛知県立芸術大学 名古屋外国語大学 名古屋学芸大学	名古屋大学 岐阜大学 愛知学院大学 名古屋経済大学 三重大学	名古屋大学 浜松医科大学 名古屋市立大学 名古屋芸術大学
平成 25 年度	静岡大学	名古屋経 済大学 名古屋 大学						
平成 26 年度	中部大学	愛知県立 芸術大学 名古屋 大学	名古屋 大学	静岡大学 名古屋工業大学 三重大学 愛知学院大学 名古屋市立大学 津市立三重短期大学 中部大学 名古屋外国語大学・名古屋学芸大学 名古屋商科大学 名古屋経済大学・名古屋経済大学短期大学部	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 名古屋市立大学 愛知学院大学	岐阜薬科大学 中京大学	名古屋大学 静岡大学 愛知学院大学 名古屋外国語大学 名古屋学芸大学 愛知県立芸術大学	名古屋大学 名古屋工業大学 名古屋市立大学 名古屋商科大学
平成 27 年度	愛知県立 大学	名古屋外 国語大学 ・名古屋 学芸大学 名古屋 大学						
平成 28 年度	名古屋 学院大学	名古屋 工業大学 名古屋 大学	名古屋 大学	岐阜大学 愛知教育大学 豊橋技術科学大学 愛知学院大学 名古屋市立大学 岐阜市立女子短期大学 名古屋学院大学 南山大学 同朋大学・名古屋造形大学 桜花学園大学・名古屋短期大学	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 名古屋市立大学 愛知学院大学	愛知県立芸術大学 中部大学	名古屋大学 愛知教育大学 愛知学院大学 南山大学	名古屋大学 愛知教育大学 名古屋市立大学 同朋大学・名古屋造形大学
平成 29 年度	豊橋技術 科学大学	名古屋 大学						

年度	総 会 当番館	研修会 会場館	会長館	運営委員会	機関誌編集 委員会	監事会	研修企画 小委員会	ホームページ 小委員会
				会長 国立3, 公立3, 私立4 (短大1を含む) オブザーバ: 総会当番館	会長 編集委員は会長の 指名	総会で選出, 監事 館の図書館長が監 事となる	会長館 国立, 公立, 私 立の運営委員館 から各1館 研修会会場館	会長館 国立, 公立, 私 立の運営委員館 から各1館
平成 30 年度	愛知大学	名古屋 女子大学	名古屋 大学	浜松医科大学 三重大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 名古屋市立大学 静岡県立大学短期大学部	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 愛知学院大学	愛知県立芸術大学 名古屋学院大学	名古屋大学 浜松医科大学 愛知県立大学 愛知大学 名古屋女子大学	名古屋大学 三重大学 名古屋市立大学 日本福祉大学
平成 31 年度	静岡文化 芸術大学	名古屋 大学		愛知大学 名古屋女子大学 日本福祉大学 岐阜保健短期大学			名古屋大学 浜松医科大学 愛知県立大学 愛知大学	

研修会一覧

東海地区大学図書館協議会研修会一覧（平成元年度～平成30年度）

年度	年月日	会場	演題	講師	所属
元	元.12.5	名城大学	学術情報サービスの展開と大学図書館	門條 司	化学情報協会
			アダム・スミスの蔵書をめぐって	水田 洋	名城大学
	2.1.31	名古屋大学	大学図書館の未来像	丸山昭二郎	鶴見大学
2	2.11.29	名古屋大学	Collection building について	川原 和子	三重大学
			大学図書館とニュー・メディア	橋爪 宏達	学術情報センター
	3.1.30	大同工業大学	『経済学文献季報』のデータベース化について－KEIS から KEIS II へ 私の日本の古典文献とのつきあい	山内 隆文 朝倉 治彦	名古屋学院大学 四日市大学
3	3.11.8	名古屋学院大	ドイツ及び英国の図書館事情	牧村 正史	名古屋大学
			江戸時代の出版	長島 弘明	名古屋大学
	4.1.17	愛知県図書館	目録システムにおけるハイパーテキストの適用可能性 新図書館概要説明及び見学	石塚 英弘 鈴木 康之	図書館情報大学 愛知県図書館
4	4.10.21	南山大学	慶應義塾大学の新しい試み－マルチメディアの統合－	原田 悟	慶應義塾大学
			図書館の施設計画に関連して	加藤 彰一	名古屋大学
	5.3.19	名古屋大学	カリフォルニア大学バークレー校の図書館システム 電子情報サービスの新しい展開	棚橋 章 寺村 謙一	名古屋大学 丸善㈱
5	6.1.26	施設見学会：けいはんなインフォザール			
	6.3.23	愛知医科大学	シーボルトと中京の学者たち 大学図書館におけるコレクション形成・管理の意義と問題点	武内 博 三浦 逸雄	東京学芸大学 東京大学
6	6.12.6	愛知学院大学	アメリカ図書館最新事情	渡辺 和代 川瀬 正幸	名古屋アメリカンセンター 名古屋大学
			地域・館種を越えた図書館サービス－すべての図書館をすべての利用者に－	雨森 弘行	三重県立図書館
	7.2.22	施設見学会：三重県図書館			
7	7.10.27	名古屋大学	鯨と捕鯨の文化史	森田 勝昭	甲南女子短期大学部
			研究図書館としての電子図書館の事例－機能と運営－	渡辺 博	奈良先端科学技術大学院大学
	7.12.7	愛知工業大学	シンポジウム：利用者教育の在り方－方法と問題点－	光斎 重治 高橋 一郎 四谷あさみ 堀 茂 金子 豊	中部大学 愛知県立大学 愛知淑徳大学 名古屋大学 名古屋大学
8	8.10.24	名古屋大学	インターネット、イントラネットを前提とした図書館情報サービスの将来	後藤 邦夫	南山大学
			電子図書館の諸相：US Berkeley Digital Library Project と Ariadne97	谷口 敏夫	光華女子大学
	8.12.4	愛知淑徳大学	シンポジウム：NDC 新版9版について	石山 洋 万波 涼子 中井えり子 酒井 信	東海大学 名古屋市立大学 名古屋大学 名城大学

年度	年月日	会 場	演 題	講 師	所 属
9	9.10.30	名古屋大学	英国大学図書館における電子情報サービスの進展	尾城 孝一	東京工業大学
			フランス国立図書館 BNF	篠田知和基	名古屋大学
9	9.12.10	朝日大学	講演 歌うコンピュータ・描くコンピュータ・マルチメディア時代への布石-	板谷 雄二	朝日大学
			フォーラム：マルチメディアと電子図書館-図書館機能におけるホームページ-	津田 明美 林 哲也 鈴木 康生 三浦 基	愛知工業大学 浜松医科大学 名古屋大学 南山大学
10	10.12.5	名古屋大学	テーマ：電子ジャーナルの”いま”と”こんご” 講演 デジタルメディアの現状と今後	逸村 裕	愛知淑徳大学
			電子ジャーナルの事例報告 EES, Science Direct FirstSearch, FirstSearch ECO Journals@ovid, HighWire Press	エルゼビア 紀伊國屋書店 ユサコ	
10	10.12.16	岐阜経済大学	テーマ：大学図書館における電子情報サービスの実際 ネット時代の教育・研究環境と図書館の活用	松島 桂樹	岐阜経済大学
			電子情報サービスの事例報告	安田多香子 野村 千里 夏目弥生子	愛知県立大学 南山大学 名古屋大学
11	11.11.2	名古屋大学	テーマ：著作権法と大学図書館 大学図書館にかかわる著作権問題	石倉 賢一	千葉大学
			電子図書館サービスと著作権	山本 順一	図書館情報大学
11	11.12.7	岐阜女子大学	テーマ：大学図書館と学生用図書 大学教育改革と学生用図書	柴田 正美	三重大学
			事例報告	江口 愛子 吉根佐和子 福井 司郎	浜松医科大学 名古屋市立大学 中京大学
12	13.1.18	愛知教育大学	テーマ：大学図書館における相互協力 大学図書館における相互協力	石井 啓豊	図書館情報大学
			事例報告	平井 芳美 濱口 幾子 加藤 直美	名古屋大学 愛知県立看護大学 愛知工業大学
12	13.3.9	名古屋大学	テーマ：大学図書館の管理・運営 大学図書館の管理・運営	長谷川豊祐	鶴見大学
			コンソーシアムを視野においた大学図書館の運営	松下 鈞	国立音楽大学
13	13.12.20	大同工業大学	テーマ：古文書の整理と保存：電子メディア変換（画像） による利用について 講演 古文書の整理と保存	秋山 晶則	名古屋大学
			事例報告 徳島大学附属図書館貴重資料高精細デジタルアーカイブ - 21世紀地域ネットワークへの試み -	岡田 恵子	徳島大学
13	14.1.24	名古屋大学	テーマ：図書館の電子化と所蔵資料を核とした地域との 連携 デジタル時代の図書館	逸村 裕	名古屋大学
			所蔵資料の高度活用を目指して - 地域の博物館・図書館 等の連携 -	種田 祐司	名古屋市博物館
14	14.12.13	名古屋大学	テーマ：学術情報の電子化を考える 講演 学術情報の電子化が意味するもの - 研究者の立場から 考える -	倉田 敬子	慶應義塾大学
			事例報告 名古屋大学における電子ジャーナルの現状について	澄川千賀子・ 川添 真澄	名古屋大学

年度	年月日	会 場	演 題	講 師	所 属
14	15. 3. 4	名古屋市立大学	テーマ：現代の大学図書館と著作権 講演 現代の大学図書館と著作権	土屋 俊	千葉大学
15	15.12.15	名古屋大学	テーマ：図書館のサービス・マネジメントと評価 講演 図書館のサービス・マネジメント：顧客の選好と評価	永田 治樹	筑波大学
	16. 2.19	椋山女学園大学	テーマ：SPARC の現状と SPARC/JAPAN の今後について 講演 SPARC の現状と SPARC/JAPAN の今後について	安達 淳	国立情報学研究所
16	16.12.17	名古屋大学	テーマ：電子的学術情報利用の進展と今後の展望 事例報告 名古屋大学の電子図書館化計画－機関リポジトリ構築計画を中心にして－ 医学系図書館の電子ジャーナル状況と日本医学図書館協会電子ジャーナルコンソーシアムの現状 電子ジャーナルの利点と課題－サイエンス・ダイレクトを例に－	郡司 久 坪内 政義 高橋 昭治	名古屋大学 愛知医科大学 エルゼビアジャパン
	17. 3. 3	ぱるるプラザ GIFU	テーマ：大学図書館におけるアウトソーシング 事例報告 日本福祉大学付属図書館におけるアウトソーシング アウトソーシングを活用した大学図書館運営－立命館大学における現状と課題－ アウトソーサーからみたアウトソーシング	岡崎 佳子 田中 康雄 図書館流通センター	日本福祉大学 立命館大学
17	17.12. 2	中京大学	テーマ：図書館情報リテラシー指導の現状－各大学の事例報告－ 基調講演 大学図書館と情報リテラシー	逸村 裕	名古屋大学
			事例報告 名古屋大学附属図書館における情報リテラシー教育 図書館情報リテラシー教育－小さな図書館、小さな学部での試み－ 中京大学図書館 情報リテラシー教育の現状 ニッチ戦略（隙間産業）で、大学に貢献できる情報リテラシー教育支援を目指す－三重大学附属図書館の取組－ 岐阜県立看護大学図書館における利用教育 大学ポータルを中心とした名古屋学院大学の情報環境	次良丸 章 原 泰子 春日井 正人 杉田 いづみ 井上 貴之 中田 晴美	名古屋大学 名古屋市立大学 中京大学 三重大学 岐阜県立看護大学 名古屋学院大学
	18. 1.30	名古屋大学	テーマ：利用者サイドに立つ図書館サービス 講演 北米大学図書館における利用者中心の図書館サービス 利用者の利用行動に基づいた図書館サービス	シャロン・ドマイヤー 越塚 美加	マサチューセッツ大学 学習院女子大学
18	19. 1.12	岐阜県図書館	テーマ：大学図書館の地域連携 事例報告 相互利用協定と愛知県内図書館の ILL 定期便設置実証実験 静岡県内の大学図書館における連携について 岐阜県における公共図書館との連携図書館 東海目録（TOMcat）：病院図書室と大学図書館の連携 図書館の教育支援、地域支援：豊田高専の英語多読を通して	村上 昇平 大石 博昭 木村 晴茂 坪内 政義 西澤 一	愛知県図書館 静岡大学 岐阜大学 愛知医科大学 豊田工業高等専門学校
	19. 3. 7	名古屋大学	テーマ：Web2.0 時代の図書館サービス 基調講演 Web2.0 時代の図書館 講演 図書館利用者の情報探索活動に関する実証的研究 Web2.0 時代の新たな図書館サービスの展開	岡本 真 寺井 仁 林 賢紀	Academic Resource Guide 名古屋大学 農林水産省

年度	年月日	会 場	演 題	講 師	所 属
19	19.11.28	名古屋大学	「図書館職員基礎研修」 講義 大学図書館職員に求められているもの 資料の収集～目録・分類 電子情報（電子ジャーナル、データベース等） 図書館情報リテラシー教育 ILL 大学図書館の最近の動向・海外事情	雨森 弘行 河谷 宗徳 栗野 容子 紅露 剛 万波 涼子 松林 正己	お茶の水女子大学 三重大学 名古屋大学 南山大学 名古屋市立大学 中部大学
	20. 3. 5	中部大学	テーマ：魅力ある大学図書館をめざして 講演 どこから拓く？ 大学図書館の可能性－学習支援の視点から ここから拓いた－お茶大図書館活性化のための5つの作戦	井上 真琴 茂出木 理子	同志社大学 お茶の水女子大学
20	20.12.22	アクトシティ松浜	テーマ：図書館と著作権 講演 図書館業務と著作権 映像資料の利用と著作権法について	南川 貴宣 三浦 正広	文化庁著作権課 国士舘大学
	21. 3. 4	西尾市岩瀬文庫	テーマ：学芸員の世界 岩瀬文庫見学 講演 学芸員の仕事－内藤記念くすり博物館の世界－ 学芸員の仕事－岩瀬文庫の世界－	野尻 佳与子 林 知左子	内藤記念くすり博物館 西尾市岩瀬文庫
21	21.12. 3	同朋大学	「図書館職員基礎研修」 講義 大学図書館職員に求められているもの 資料の収集～目録・分類 電子情報（電子ジャーナル、データベース等） 情報リテラシー教育 ILL 大学図書館と広報	雨森 弘行 河谷 宗徳 栗野 容子 久田 睦美 榊原 佐知子 渡邊 敏之	前お茶の水女子大学 三重大学 名古屋大学 名古屋市立大学 愛知医科大学 名古屋造形大学
	22. 2.23 22. 3. 5 22. 3.10	名古屋大学	保存修復講演会・講習会 テーマ：図書資料の保存と修復 講演 紙資料の保存修復 講習会 修復実務講習会	金山 正子 岩田 起代子	元興寺文化財研究所 前名古屋産業大学・ 名古屋経営短期大学図書館
22	22.12. 9	名古屋大学	テーマ：実践で役立つレファレンス・ツール－国立国会図書館提供ツールを中心に－ 講義1 講義2	兼松 芳之	国立国会図書館
	23. 3.16	静岡県男女共同参画センターあざれあ	テーマ：電子書籍を中心とした資料のデジタル化の動向と図書館の今後 講演 変革期のデジタル化と図書館－国立国会図書館の動向を中心に－ 電子書籍の急速な普及と大学図書館	中井 万知子 竹内 比呂也	国立国会図書館関西館 千葉大学
23	23.12.15	名古屋大学	「図書館職員基礎研修」 講義 大学図書館職員に求められているもの 資料の収集～目録・分類 電子情報（電子ジャーナル、データベース等） ILL プレゼンテーション入門 カナダの大学図書館事情	加藤 信哉 河谷 宗徳 堀 友美 万波 涼子 近田 政博 ゴードン・コールマン	名古屋大学 三重大学 名古屋大学 名古屋市立大学 名古屋大学 静岡大学
	24. 3. 8	名古屋大学	テーマ：災害時における危機管理 事例報告 そのとき私たちができたこと－東北大学附属図書館が遭遇した東日本大震災－ 私の東日本大震災体験－図書館の被害と復旧を中心として	小陳 左和子 和知 剛	東北大学 郡山女子大学

年度	年月日	会 場	演 題	講 師	所 属
24	24.12.15	名古屋大学	テーマ：海外大学図書館にみる学習支援 報告 香港、シンガポール、オーストラリアの大学図書館におけるラーニング・コモنزの整備及び学習支援の現状 講演 大学図書館が実施する学習支援・教育支援サービス 北米の事例から見えるもの パネルディスカッション	山田 政寛 橋 洋平 森部 圭亮 仲秋 雄介 池上 佳芳里 高橋 里江 神谷 知子 長澤 多代 近田 政博 (コーディネーター)	金沢大学 金沢大学 静岡大学 名古屋大学 金沢大学 静岡大学 名古屋大学 三重大学 名古屋大学
	25. 3.13	三 重 大 学	テーマ：図書館資料の補修について 講義 図書館における資料保存の基本的な考え方 実習 簡易な補修 - 破れのつくろい、外れたページの差し込み	大竹 茂 大竹 茂	国立国会図書館 国立国会図書館
25	25.12.13	名古屋大学	「図書館職員基礎研修」 講義 激動の時代を生き抜くために 情報リテラシー教育 ILL(相互貸借) 電子情報(電子ジャーナル、電子ブック、データベース等) 分類・目録 プレゼンテーション入門	白木 俊男 新海 弘之、 草間 知美 島田 美津穂 林 和宏 揚野 敏光 近田 政博	富山大学 愛知県立大学 愛知大学 名古屋工業大学 名古屋大学 名古屋大学
	26. 3. 3	名古屋経済大学 (名駅サテライト キャンパス)	テーマ：西洋古典籍資料の整理・保存について 講演 歴史的製本の修理について 洋書の扉	岡本 幸治 高野 彰	製本家、アトリエ・ ド・クレ主宰 元跡見学園女子大学
26	26.12.19	愛知県図書館	テーマ：「機関リポジトリの基礎知識と最新動向」 講演 学術コミュニケーションの動向 機関リポジトリの実務 著作権・学位論文を中心に 事例報告 地域からの事例報告 全体質疑・意見交換	杉田 茂樹 三隅 健一 林 和宏 宮坂 昌樹 鈴木 雅子 (コーディネーター)	千葉大学 北海道大学 名古屋工業大学 愛知大学 静岡大学
	27. 2.16	静岡大学 (浜松キャンパス)	※静岡県大学図書館協議会と共催 テーマ：学生を振り向かせる！伝わるポスター作成術 講演 基礎) ポスター、チラシ、プレゼンテーションに必要な要素 理論) コミュニケーション理論から見た広報 実践) 便利なツール、テクニック、キャッチコピーの つくり方 広報カウンセリング ポスターを作ってみよう	はやのん	理系漫画家
27	27.12. 7	名古屋大学	「図書館職員基礎研修」 講義 「最近の図書館の動向 ～素敵な図書館と素敵なライブラリアンとの出会い～」 情報リテラシー教育 ILL(相互貸借) 電子情報(電子ジャーナル、データベース等) 分類・目録 グループ討議・発表	中村 直美 松森 隆一郎 加藤 直美 吉岡 文 小島 由香	愛知大学 愛知県立大学 愛知工業大学 浜松医科大学 名古屋大学
	28. 3. 7	名古屋外国語大学 名古屋学芸大学	テーマ：伝わる声の出し方・話し方 講演(実習含む)	赤間 裕子	声と話し方コンサル タント

年度	年月日	会 場	演 題	講 師	所 属
28	28.11.22	名古屋大学	テーマ：無線綴じ資料の補修 講演（実習含む）	板倉 正子	特定非営利活動法人 書物の歴史と保存修復に関する研究会
	29. 2. 6	名古屋工業大学	テーマ：古典籍の基礎知識 講演 洋古典籍はどんな姿をしているのか 水田文庫整理にたずさわって 古典籍書誌DBのすすめ	高野 彰 中井 えり子 塩村 耕	元跡見学園女子大学 元名古屋大学 名古屋大学
29	29.11.17	名古屋大学	「図書館職員基礎研修」 講義 レファレンス（現場からの具体的な事例紹介） 図書館若手職員の経験談	佐藤 美穂 井出 直樹 東横 典子 鰐部 美香	名古屋大学 静岡文化芸術大学 名古屋外国語大学・ 名古屋学芸大学 名古屋大学
			これからの図書館に期待するもの 演習 広報・展示：朝刊の記事から pop を作り、2時間以内に 資料を展示－安城市図書館「日めくり展示」にチャ レンジー 担当業務別グループによる討議・発表	押樋 良樹	図書館コミュニケー ションデザイナー
30	31. 2.14	名古屋女子大学	テーマ：利用者と図書館をつなぐ空間づくり 講演 ワークショップ1 利用者の目線を考える ワークショップ2 空間のイメージをつかむ	尼川 ゆら	空間演出 コンサルタント

「東海地区大学図書館協議会誌」掲載記事の電子的公開，転載，学術機関リポジトリでの公開について

- ・著作権は著作者本人にあります。
- ・著作者本人が，ホームページ等で電子的公開，転載，あるいは学術機関リポジトリへ搭載する場合，著作者本人からの申請書等の提出は必要ありません。

(平成 19 年 7 月 9 日 東海地区大学図書館協議会運営委員会 (第 19-1 回) 決定)

東海地区大学図書館協議会誌 第 64 号 (2019)

令和元年12月25日印刷

令和元年12月27日発行

編集・発行 東海地区大学図書館協議会事務局
名古屋市千種区不老町 名古屋大学附属図書館内
電話 052-789-3666

ホームページ <http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/tokai/>

振込先 三菱東京UFJ銀行今池支店 普通預金 口座 1747229